

伊藤家の食卓

～ある家庭の何気ない(?)日常風景～

- 二十歳の頃のパスポート（二〇〇五年一月）
- 目覚まし時計（二〇〇五年七月）
- 運動会（二〇〇五年十月）
- 合格発表（二〇〇六年二月）
- 財布の盗難（二〇〇六年十一月）
- 任天堂DS（二〇〇六年十二月）
- 納豆が無い（二〇〇七年一月）
- ビリーズブートキャンプ（二〇〇七年八月）
- ラウンドワン（二〇〇七年七月）
- リアルにウザイ（二〇〇七年八月）
- ポーリング（二〇〇七年九月）
- 青あざ（二〇〇七年十月）
- 懐かしの名曲（二〇〇七年十二月）
- 別居したい（二〇〇七年十二月）

- 定額給付金（二〇〇八年十二月）
- 盲腸（二〇〇九年一月）
- 卒業式（二〇〇九年三月）
- 酔っ払い（二〇〇九年五月）
- ハナ（二〇〇九年九月）
- 泡盛（二〇一〇年一月）
- 避妊手術（二〇一〇年三月）
- がん検診（二〇一〇年四月）
- サツマイモダイエット（二〇一〇年五月）
- 引退試合（二〇一〇年七月）
- アゲパン（二〇一〇年十月）
- 龍馬伝（二〇一〇年十一月）
- ひとり暮らし（二〇一一年一月）
- オトコデ（二〇一一年二月）

- ブライダルキャンドル（二〇一一年三月）
- 失恋（二〇一一年五月）
- 新しい彼氏（二〇一一年七月）
- コンサート（二〇一一年十二月）
- ボランティア（二〇一二年二月）
- ついていない日（二〇一二年十月）
- 実家への訪問（二〇一二年八月）
- 誕生日（二〇一二年十二月）
- 自動車運転（二〇一三年三月）
- 熱海行き（二〇一三年四月）
- ハナのしつけ（二〇〇三年六月）
- 老眼（二〇一三年七月）
- スマホの追跡（二〇一三年十一月）
- 人間ドッグ（二〇十四年二月）

- 仮面ライダー（二〇一四年四月）
- 娘の友達（二〇一四年五月）
- ハナの悪戯（二〇一四年六月）
- スカウト（二〇一四年八月）
- クラシックコンサート（二〇一四年十一月）
- 縄文土器（二〇一四年十二月）
- 鼠径ヘルニア（二〇一五年四月）
- プロポーズ（二〇一五年七月）
- てあしくちびょう（二〇一五年八月）
- ワンダーコア（二〇一五年九月）
- 結婚式（二〇一五年十一月）
- 女房の筋トレ（二〇一六年一月）
- テニス合宿（二〇一六年六月）
- EXILE(二〇一六年七月)

- 加齢臭（二〇一六年九月）
- 御来光（二〇一七年一月）
- 彼氏との会食（二〇一七年二月）
- ぶらさかり健康器（二〇一七年五月）
- 黒の歯ブラシ（二〇一七年八月）
- マウンテンバイク（二〇一七年十月）
- 洗濯ネット（二〇一七年十一月）
- 同棲（二〇一八年六月）
- 時代は変わった（二〇一八年十一月）
- 第二の子育て（二〇一九年七月）

二十歳の頃のパスポート（二〇〇五年一月）

先日、部屋の片付けをしていたら20歳の頃のパスポートが出てきました。
それを見た娘たちが腹を抱えて笑うこと！
「お父さん。昔はたくさん髪の毛あったんだね」

周囲の人から、「年齢よりも若いよね」と言われる私。
自分としても、「昔とそれほど変わっていない」と思っていました。
しかし、写真を見たら一目瞭然。
特に髪の毛のボリュームが全く違います。

リアップが発売された時から、ずっと使い続けているのに・・・
最近、家族の言葉が胸に突き刺さります。
「気休めにしては、リアップはちょっと値段が高いよね～」

目覚まし時計（二〇〇五年七月）

「ピピピピピピピピピピピピピピ…」

六時前に電子音が鳴りました。

十秒、二十秒… 一向に消えない音。

「何やってんのかな、早く消せよ」

朦朧としている意識の中でつぶやきます。

三十秒くらい経過した後、ようやくストップ。

ところが、その十分後、またしても「ピピピピピ…」

堪忍袋の緒が切れた私は、ムクツと起き上がって、娘の部屋に向かいました。

ところが、娘の部屋の前に立ったら、電子音が逆に小さく聞こえます。

「あれ？、もしかしたら…」

そう、電子音の音源は、隣りのお宅だったのです。

私の家と、お隣りの家の間は、ほんの数メートル。

お互いに窓を開けて寝ていれば、音が聞こえて当たり前です。

「うるさいな～、早く止めろよ！」

娘が騒音源だと思っていたので、二度目に鳴った時は、この言葉が、喉元まで出ていました。

いや～、怒鳴らなくて良かったです。

そんな言葉を発していたら、きっとお隣りに聞こえてしまっていたでしょう。

「お前の家だって、うるさいじゃないか！」

そんな言葉が返ってきたら、たまらないですから。

その日以降、自分の目覚ましが鳴ったら、二秒以内で止めています。

運動会（（二〇〇五年十月）

「小学校と比べると、生徒が冷めていて、けだるい感じ」
中学校の運動会について、正直、私はそう思っていました。
ところが、娘たちの中学校の運動会は、予想外に「熱い」のです。
一週間くらい前から、各クラスで朝練を行ったり、放課後に作戦会議を開いたり・・・
長女は三年生ですが、受験勉強はそっちのけです。
学校側は、生徒の負担を減らすために、昨年まで行っていた女子のダンスや、男子の組
体操をプログラムから外そうとしたのですが、生徒側の猛抗議に合って断念しました。

そして当日。
クラス対抗ということもあり、皆、本当に一生懸命です。
リレーや長距離走などでは、精根尽き果てて、ゴール後に立ち上がれなくなり、保健室に
運びこまれる生徒が大勢いました。
勝ったら勝ったで、嬉し涙。負けたで負けたで、悔し涙。
「たかが運動会」なのに、涙、涙で、ちょっと感動しました。

「最近の若者は冷めている…」 「頑張ることができない…」
よく言われますが、決してそんなことはありません。
「自分のパワーを発散したい気持ちはあるけれど、、どこに発散していいのかわ見つけられない……」
たぶん、そんな感じです。
我々大人がすべきことは、彼らがパワーを発散できる環境をつくってあげること。
責任重大です。

合格発表（二〇〇六年二月）

娘の高校受験の合格発表日。
インターネットで公表しているので、外出先からでもチェックできます。
ソワソワ、ドキドキ……

十四時半が発表時刻ですが、仕事が手につきません。
さて、時間になったので、ホームページを開いて、いざクリック。
合格発表を見るのは、二十五年振りで、わきの下が汗ばみます。

「よし！」

受験番号を見つけて、ほっと一息。

さっそく、娘の携帯にメールを入れました。

「おめでとう！ 志望校に合格できて良かったね。今日は特別な日だから、お土産買って帰るからね」

5分後に着信がありました。

「ありがとう！ お父さんとお母さんのおかげで合格できました。感謝します！」

という文面を期待していた私が甘かった！

「どうも」

私の眼に飛び込んできたのは、たった三文字のひらがなだけ。

完全に拍子抜けです。

夜、シャンパンとケーキを土産に持って帰ったら、娘からひと言。
「お父さんは、減量中だからケーキは三等分に切ればいいよね」
オイオイ、今日は特別な日だから、減量は中断。
皆で食べるために買ってきたのだから、俺の分も切ってくれ！

財布の盗難（二〇〇六年十一月）

「あれ、財布が無い」

松本駅で特急列車を降りる時に気づきました。

八王子で乗車してからスーツの上着を、隣の席の上に置いたままの私。

二時間ずっと爆睡状態でした。

「寝ている間に、盗まれてしまった！」

即座に、そう思いました。

現金は少なかったですが、カードは五枚くらい入っています。

さらに悪いことには、その日、たまたま財布に「保険証」を入れていました。

「保険証を持ってサラ金にでも駆け込まれたらどうしよう・・・」

あわてて、駅に隣接している交番に向かいました。

「保険証はまずいな・・・」

ひとり言のようにつぶやく、おまわりさん。

必死で紛失届を書いている私は、余計に気持ちが滅入ります。

「それでは、これから状況をお聞きします」

紛失届の内容を見ながら、おまわりさんは、質問を開始しました。

「失くしたことは、どこで気づきました？」

「松本駅に着いた時です」

「それでは、最後に財布を見たのは、いつですか？」

「最後に財布を見た？」

「そう、電車の中ですか？ それとも、切符を買った時ですか？」

「ん？ もしかしたら・・・」

その瞬間、私の脳裏を「あること」がよぎりました。

自宅から国分寺までは、パスネットを使って行ったし、JRへの乗り換えは、もともと持っていた切符で入ったし・・・

「すみません。ちょっと電話してきます」

交番を出て、即座に自宅に電話する私。

「もしもし。もしかして、俺、今日、財布を家に忘れていなかった？」

「すみません、一件落着です。財布は発見されました！」

怪訝な顔のおまわりさん。

私は余計な手間をとらせてしまったことを謝罪し、交番を後にしました。

これぞ、とんだ勘違い！
反省、反省、また反省です。

任天堂DS（二〇〇六年十二月）

我が家で、ニンテンドーDSを購入しました。。
まずは、定番の「脳を鍛えるトレーニング(脳トレ)」を試してみたら・・・
ショック！！
コンサルタントは、一応、頭を使う仕事なのに、私の脳年齢は、なんと七十歳です。
いろいろなテストがあるのですが、一番苦手なのが記憶力を試すもの。
「うちわ」「かかし」「とけい」「てがみ」・・・
三文字の単語を、三分間で三十個憶えます。
そして、画面が消えた後に憶えた言葉を書き出すのですが、これができない・・・

「??？」

画面とともに、頭の中まで真っ白になってしまいます。

私の場合は、思い出せたのは、一桁だけ。

記憶力の低下は、以前から実感していましたが、まさかここまでとは・・・

名誉挽回のために、次は「スーパーマリオ」に挑戦です。

娘たちは、軽々ステージをクリアするのに、私は、ずっと同じところ。

敵に攻撃される前に、谷に落ちたり、自ら敵にぶつかったり・・・

「お父さん、自殺したらダメだよ！」

妙な動きのマリオを見ながら、腹をかかえて笑う娘たち。

親の威厳は完全に失墜してしまいました。

「こんなもの買わなければ良かった・・・」

ガックリと肩を落とします。

納豆が無い（二〇〇七年一月）

「な、な、無い……」

所沢のスーパーから納豆が消えました。

理由は、「あるある大事典」での納豆のダイエット効果についての特集です。

番組によると、納豆については、これまで血をサラサラにする効果等は有名でしたが、それに加えて、ダイエット効果もあるとのことでした。

ただし、食べ方が肝心で、一日に朝晩二パック食べることと、混ぜてから二十分、放っておくことが必要です。

「これだ！」

折りしも、年末年始の暴飲暴食がたり、体重は史上最高状態の私。

翌朝、近所のスーパーに走り、納豆を十五パック買ってきました。

そして、一週間、毎朝毎晩、納豆を混ぜ混ぜです。

ある日、「在庫が切れたので夜に買って帰ろう」と思って、近所のスーパーに行ったら冒頭の始末。

「他のスーパーは？」

近所の四件のスーパーを廻りましたが、全て同じ状況でした。

「せっかく一週間も続けてきたのに・・・」

番組の中で、「二週間続けると効果がある」と話していたので、悔しい限りです。

どうしても、あきらめきれません。

車でコンビニを回ったところ、四件目のローソンでやっと巡り合えました。

「おかめ納豆」の二個入りが四パック。

即座に購入し、ようやく一件落着となりました。

そして、私は次の日から三泊四日の地方出張。

こうなったら持っていくしかありません。

しっかりカバンに詰め込む姿を見た娘からひと言。

「出張に納豆を持って行く人は、たぶん、世の中で父さんだけだと思うよ」
「今に見ていろよ！ スリムなナイスボディになってやるから」
心に誓って旅立ったのですが……

「な、な、な、何だと～」

出張から帰った翌々日、新聞の記事に目が点になりました。

そう、あの「納豆ダイエット」は何と捏造だったのです。

モニター調査の結果はウソ。

教授の言葉もウソ。

ウソ、ウソ、ウソ、ウソ。

「あるある大事典」ではなく、まさに「ウソウソ大事典」です。

冷蔵庫を開けて見たら、中は納豆の山。

「まだ、たくさん納豆残っているよね～ ちゃんと始末してね」

「やっぱりね～、そんな簡単にやせられるんだったら苦労しないよね～ ダイエットは、地道に努力しなくちゃ」

「お父さんって、まさにカモだよね～ 悪い人にだまされちゃダメだよ」

勝ち誇ったような妻と娘。

「ん～～くやしい～～」

ということで、それから在庫消化の毎日。

ちなみに、納豆はとっくに賞味期限を過ぎています。

「腹こわしたら訴えてやる！」

心の中でつぶきやきます。

ビリーズブートキャンプ（二〇〇七年八月）

「ビリーズブートキャンプ」は、日本中でブームの「ダイエット用DVD」。軍隊でのトレーニングをベースにした、「筋トレ」プログラムです。

納豆ダイエットに失敗した私。どうしても心が惹かれてしまいます。

「このDVDどう思う？」

「いいんじゃないの。買ってみたら」

女房に相談したら、予想外の好反応。

どうやら女房もTVを見て気になっていたようです。

こうなれば、もう怖いものなし。

インターネットで即座に注文しました。

そして、品物が到着し、早速、夫婦でトレーニングです。

辛いものなんのって、ハンパじゃありません。

約一時間の内容ですが、十分後には、手足がパンパン。

「ワン、ツー、スリー、フォー……」

画面の中の女性たちのカウントに合わせて行うのですが、ついて行くことができません。

「オ～、ウ～、ウソ、ムリ……」

妙な喘ぎ声が響く室内。

女房も私もプライドがあるので、途中で止めることはできません。

ボロボロになりながら、なんとか最後までこなしました。

終了後は廃人状態です。

さて、伊藤家での結果は？

女房は、一週間で全巻完了。

ん～～、そうなんと厳しいのが私の立場。

夫の意地で、ひと月かけて、ようやく最後までたどり着きました。

ちなみに、体重は？

減る訳がありません。
トレーニング後のビールは最高ですから。

ラウンドワン（二〇〇七年七月）

日曜日の午後、珍しく家族4人の時間が空いていたので、近所の「ラウンドワン」に行きました。

「ラウンドワン」は総合アミューズメント施設。

諸々のスポーツから、カラオケ、ゲームまで、思う存分遊ぶことができます。

「親父の威厳を見せる機会！」と勇んで出かけました。

まずは、スポーツ施設で、バレーボールやバドミントン。

学生の頃は、得意だったはずなのに……

ところが、やってみたら全然ダメ。
バドミントンでは、まさかの空振り。
意識と身体が全く噛みあいません。

次は、カラオケ。

自動採点マシンで対戦です。

「お父さんは、どうせ昔の歌でしょ」

そんな娘の挑発に乗ったのが間違いでした。

「俺だって、新しい歌くらい歌えるよ！」

私が選んだのは、車の中でひそかに練習していたコブクロの曲。

車の中では「結構、イケてる」と思っていたのに、実際に歌ってみるとサッパリ。

キーが合わずに、ボロボロです。

一方、娘たちは、90点台を連発。

特別に上手いとは思わないのですが、どうやら、マシンの採点基準を熟知しているようで

す。

最後は、ゲームコーナー。

任天堂のDSでも苦勞している私にとっては苦手な分野。

案の定、ドライビングゲームでは、クラッシュの連続。

リズムに合わせて叩くドラムは、和太鼓のようです。

親父の威厳はどこへやら…

帰りの車の中で、ひとり寡黙な私でした。

リアルにウザイ（二〇〇七年八月）

うちの長女は、高校一年生。

この間まで、ランドセルを背負っていたと思っていたのに…

子供の成長は早いものです。

先日、娘が風呂上りに、ドライヤーで髪の毛を乾かしていました。
鏡に映っている顔は、ちょっと妙な感じがします。

「何か変だな…」

よく見たら、眉毛の形が変わっていました。

少し前までは、私と同じ、クッキリ眉毛。

それが、いつの間にか、細くて、薄い眉毛に変身しています。

「おい、お前、いつからそんな眉毛になったんだ？」

私の声にゆっくり振り向く娘。

そしてひと言。

「お父さん。リアルにウザイから…」

「ん？ リアルにウザイ？」

その瞬間、言葉の意味を理解できない私。
何も言わずに、その場を立ち去りました。

「リアルにウザイ…」

よく考えれば、キツイ言葉です。

「リアル」とは、「本当に」という強調語。

そして、「ウザイ」というのは、ご存知の通り、「疎ましい」の今風言葉。

親に向かって、そんな言葉を投げるとは…

せめて、こっちがすぐに分る言葉で、話せつちゅうの！

まあ、「お父さんって、あんたって本当に疎ましいね～」なんて言われたら、それはそれで、ガックリしますが…

ボーリング（二〇〇七年九月）

先日、久しぶりに女房とデートしました。
映画を見て、ちょっと贅沢な食事をするプランです。
「ダイ・ハード4. 0」の上映時間を確認した後、レストランを予約して、準備万端で出発しました。

映画館に到着し、「これから」というところでハプニング。
何と、映写機トラブルで上映が中止になってしまいました。
「申し訳ございません…」と平謝りする係員。
「西遊記だったら、同じ時間に別の部屋で上映しますが…」
ちょっと考えましたが、女房と二人で、いくらなんでも「悟空」はありません。
仕方なしに、映画館を後にしました。
といっても、レストランに行くには早すぎるし…
結局、私たちが向かったところは「ボーリング場」。

ちなみに、女房と二人でポーリングするのは、二十年振りくらいです。

「五ゲームまで投げ放題のプランがあります。三ゲーム以上投げるのでしたらお得ですよ」

「××放題」という文句に弱い私たち。

フロントの男性の言うとおりに、そのプランを選択しました。

「それと、男女二名様の場合は、一ゲームで合計280点以上とると、景品を差し上げます。頑張ってくださいね」

いよいよゲーム開始です。

1ゲーム目は、予想通りボロボロ。

しかし、やっているうちに、だんだん感覚が戻ってきます。

そして、三ゲーム目の最終フレーム。

先行の私が終了した段階で、二人の合計は272点。

女房があと8ピン倒せば、景品ゲットです。
ところが、結果は7ピンどまり。
ここで止める訳には行きません。
老体にムチ打ち、四ゲーム目に突入しました。
しかし、このゲームも270点台で終了です。

「こうなりや意地だよね」
五ゲーム目は真剣そのもの。
会話もしないで、黙々と投げ続ける私と女房。
結果は、292点でようやく景品を獲得できました。

翌朝、起きたら二人とも腰は痛いし、腕は上がらない・・・
五ゲームのせいで、身体がボロボロです。
そんな姿を冷笑している娘たち。

「全く、お父さんも、お母さんも・・・ もう少し大人になったら・・・」

「……」

返す言葉がありません。

青あざ（二〇〇七年十月）

「お客様に心行くまで楽しんでいただくことが、接待の心得。飲み会で盛り上がっている時は、決して自分から『お開き』にしないこと」

私が社会人になって初めて入った某商社での、先輩からの教えです。

「三つ子の魂百まで」とは、よく言ったもので、今でも、その習慣は変わりません。

先日、お客様との懇親会がありました。

一次会で話が盛り上がり、そのまま六名でカラオケボックスに直行。

飲んで歌って大騒ぎです。

実は、私は翌朝から一泊二日のテニスの合宿。
早く帰って、体調を整えたいところだったのですが、なかなか皆、帰らない・・・
予約曲が無くなって、「そろそろお開きかな・・・」と思ったら、次の人が「ピー」と入力。
終電が無くなってしまったら、もう何も怖いもの無し。
結局、午前二時半まで、馬鹿騒ぎをしていました。
家に帰ったら三時過ぎ。
さすがに、風呂に入る気力も無く、そのまま就寝です。

三時間後に、目覚まし時計と格闘しながら起床しました。
アルコール漬けになった身体をリフレッシュするために、シャワーを浴びたところ、異様な
ものが目に入りました。
それは、私の両足の太股についた、大きな青あざ。
直径十センチくらいは、あります。

「何これ？ もしかしたら病気？」

一瞬にして酔いがさめる私。

しかし、よく考えたら思い出しました。

それは、前日のカラオケボックスで、マラカスを両手に持ってドラムのように、太股をバンバン叩いている自分の姿。

「全然、痛くなかったのに・・・」

快晴の天気の中、半袖半ズボンで気持ちよさそうにテニスをする仲間たち。

私はあざを隠すために、長ズボンで汗びっしょり。

「まあ、お客様が楽しんでいたのでいいか・・・」

アホさ加減にあきれながらも、懸命に自分を納得させています。

懐かしの名曲（二〇〇七年十二月）

「五番街へ行ったならば、マリーの家へ行き～」(註 番街のマリーへ byペドロ&カブリシャス)

懇親会の後、ホテルの部屋でテレビをつけたら、そこに流れる昔、懐かしい音楽。
テレビの通販番組です。

酔っ払いながら、口ずさむ私。

「あの時の思い出がよみがえる！ 七十八曲を収録した特別版！ CD四枚で何と九千八百円！ お買い求めはフリーダイヤル〇一二〇 ××× ×××まで！」

アルバムのタイトルは「青春の時代(せいしゅんのとき)」。

時代と書いて「とき」と読む・・・ とても心が惹かれます。

「よし買おう！」

衝動的に携帯電話を握りました。

三日後に注文していた品物が到着し、すぐにリビングで曲をかけました。

「昔の曲も、なかなか良いよね」

「……………」

そんな私の声かけに対して無反応な女房と娘。

妙な空気が流れます。

「昔の歌って暗いよね…」

そう言いながら、ひとりずつ部屋を出て行き、結局残ったのは私ひとり。

どうやらお気に召さないようです。

「仕方がない。車に乗るときに聴こう」

女房と買い物のために外出した時のこと。

車内では、「青春の時」がガンガン流れます。

「探し物は何ですか？ 見つけにくいものですか？」（夢の中へ by井上宇陽水）

ボリュームを上げて、一緒に口ずさむ私に女房からひと言。

「ちょっとボリュームさげてくれない。外に聞こえると恥ずかしいから」

「……」

「涙で文字が滲んでいたなら、わかってください～～」（註:わかってください by因幡晃）
心にさびしく響きます。

別居したい（二〇〇七年十二月）

「もう、別居したいよ……」

「ん？ 何？」

女房の突然の言葉に戸惑う私。

「何か、まずいことでもバレたかな……」

頭の中で、グルグル思いが巡ります。

「だって、夜、うるさくて、熟睡できないもん。これじゃあ、寝不足になっちゃうよ」

原因は、私のいびき。

もともと、それ程、いびきをかき体質では無かったのですが、加齢のせいかな、最近では、深酒をすると、その晩に「グーグー」「ガーガー」しているようです。

十二月は、それがほとんど毎日。

さすがに、女房も我慢ができなくなりました。

「別居といっても、寝る場所が無いじゃない」

「楽器部屋でもいいんじゃないの」と真顔の女房。

ちなみに、我が家では、一室が娘の楽器に占領されてしまっています。

マリンバ(=木琴のオバケのようなもの)の下だったら、スペースはありますが、さすがに、それはちょっと・・・

閉所恐怖症気味の私にとっては、つら過ぎます。

なんとか、女房を説得し、「同居」を続けてもらうようにしました。

ある日、ドラッグストアで、ひとつの商品が目にとまりました。

その名は「ブリーズライト」。

鼻孔拡張テープです。

「鼻の上に貼って寝れば、いびきを静めて快適睡眠！」

やってみると、確かに宣伝文句通り、効果はバツグンで、深酒しても、いびきをかくことはありません。

これで別居問題は一件落ち着きましたが、鼻にテープを貼っている姿はなんともカッコ悪いです。

まるで、鼻革をはめられた馬のよう……

「お父さん、そんなものを貼っていると、鼻の穴が大きくなるんじゃないの……」

娘たちから気に障るひと言。

最近では、鏡で鼻の穴をチェックすることが多くなりました。

バレンタインデー（二〇〇八年二月）

二月十三日の夜のこと。

高二の娘が、めずらしく台所で作業しています。

「やっぱり年頃だな・・・」

そう思いながら、ちらっとのぞいてみると、そこには、四十センチ角のチョコレートケーキが二枚。

熱い思いを伝えるにしても、いくらなんでも大きすぎます。

「これ、誰にあげる気？」

「テニス部のみんな」

「みんなって何人？」

「五十人くらいかな・・・」

まるでマザーテレサのようです。

話を聞けば、高校生の間では、「義理チョコ」ならぬ「友チョコ」が流行しているとのこと。
お互いにチョコレートを作ってきて、渡し合うそうです。

思い起こせば三十数年前。

「もしかしたら、入っているかも・・・」

ドキドキしながら下駄箱を開けたり、机の中を探したり・・・

「伊藤君。××ちゃんが、話があるって」

「オー——」という友達の冷やかに照れながら教室の外へ出て行ったり・・・

なんと純粋な青春時代！

私たちにとって、二月十四日は特別な日でした。

それが今や・・・ いや～～ 時代は変わりました。

翌日、大きな袋を抱えて、チョコレートを持っていく娘。

「お父さん、その『切れ端』食べてもいいよ」
「お前、五十人分作るんだったら、俺の分もあつたっていいんじゃないの・・・」
そう思いながらも、声に出せない私です。

定額給付金（二〇〇八年十二月）

「iPodが欲しいなあ～」
娘からの久し振りの「おねだり」です。
父親は、娘の「おねだり」には、弱いもの。
しかし、即座に「いいよ・・・」では、軽く見られてしまいます。
ここは、オヤジの威厳の見せどころ。
ちょっと焦らすことにしました。

「今使っているMDウォークマンで十分だろ？」

「ううん。MDだったら、CDを借りてこななければならないでしょ。
iPodならば、パソコンからそのままダウンロードできるから全然便利」
「別に今じゃなくても、受験が終わってからでいいんじゃないか。気が散るだろ？」
「ううん。iPodで英語のリスリングの勉強もできるんだよ。私はリスリングが苦手だから
ちょうどいいの」
ああ言えば、こう言う・・・
まるで予想していたかのような見事な切り返し。
どうも、「今、買う」ことに関しては、避けられそうもありません。

「どうせお年玉をもらうんだから、そのお金で買えばいいじゃないか」
私は、議論をお金の「出所」に向けました。
「そんな言葉は想定内！」とばかりに、ニヤリとする娘。
次の瞬間、驚くべき言葉が返ってきました。
「お父さん、私の分の定額給付金あげるから」
「ん？」
「十八歳以下だから、ひとり二万円でしょ。iPodは一万七千八百円だから、少し損する
けれど、まあいいよ」

定額給付金を持ちだすとは・・・まさかの展開です。

先日、家電量販店でお買い物。

代金を支払いながら、ふと、考えました。

「まさか、定額給付金が国会で通らないことなんかないよね・・・」

盲腸（二〇〇九年一月）

「夕、夕、夕、大変！」

新幹線での移動中に女房から一通のメールが届きました。

「何事？」

メールを確認した私は、目がテンになりました。

「ヨシミが盲腸になっちゃった！」

ヨシミは伊藤家の長女で、高校三年生。

明日は、「大学入試センター」の試験日です。

お医者さんの話では、投薬でちらすことによって、何とか受験は可能とのこと。

しかし、油断はできません。

「ヨシミちゃん、試験を受けていて少しでも痛くなったら、すぐに試験監督の人に事情を話して、救急車を呼んでもらいなさい。腹膜炎になったら、最短2時間で死んじゃうからね」

いざ当日。

私は出張中なので、女房が自宅で待機することになりました。

「ヨシミをくれぐれも頼む」

「了解。必ず、生かしておくから」

とても、入試の朝の会話とは思えません。

日曜日の夜に帰宅した私。

二日間の試験を終えた娘は、予想以上に元気でした。

「試験、どうだった？」

「もう、死ねって感じ。チヨ～撃沈」

どうやら、今ひとつだったようです。

「それは、盲腸のせい？」
「いや、全然関係ない」
受けてだめなら仕方なし。
サッパリした表情の娘を見て安心しました。

卒業式（二〇〇九年三月）

高校に通う娘の卒業式。
これまで、娘の高校に一度も足を踏み入れたことがない私。
「どんなどころか、一度くらいは見ておきたいな・・・」
そう思い、行くことにしました。

娘の高校は、ミッション系(キリスト教系)の学校で、私が卒業した都立高とは大違いです。
まず、卒業式の場所がチャペル(聖堂)。
スタンドグラスが輝きます。

式の最初に賛美歌をうたい、その後は祈祷。

「へえ～、なるほどね～」

仏教式で結婚式を挙げ、神社に初詣に向う私にとっては、非常に新鮮です。

次は、校長先生の話。

これが、長～～～い。

二階にある保護者席から下を眺めたら、半分くらいの生徒はグロッキー。

頭が床と並行になってしまっています。

「オイオイ、卒業式くらい居眠りしないで頑張れよ！」

クライマックスは、卒業証書の授与。

ひとりひとりが名前を呼ばれ、壇上に登場します。

まずは、列席者に一礼するのですが、ちょっと待った！！

皆、お時儀が下手くそなこと！

お時儀というよりは、むしろ「うなずき」という感じ。

頭をコックリ下げるだけです。

「お時儀をする時は、腰から曲げろ！」

さらに、歩き方もフラフラだし、証書もお時儀をしながら受け取るし・・・
「ちょっと、違うだろ！ お前らやる気あんのか！ 受け取ったら一歩下がって、そこでお時儀して・・・
それにしても、先生は、何で教えないの？？？」
仕舞いには、先生に矛先が向かいます。
「今どきの高校は・・・先生もマナー研修を受けた方がいいんじゃないの！」
私は、ちょっとイラつきながら、式は終了しました。

しかし、式の終了後の風景を見て、気持ちが晴れました。
そこで見たのは、昔と変わらない卒業式後の風景。
先生と生徒が楽しそうに記念写真を撮る姿。
後輩からプレゼントを受け取り、嬉しそうに微笑む姿。
同級生と抱き合いながら、別れを惜しむ姿。

考えてみれば、卒業式は、所詮、形式的なもの。
大事なことは、それまでの三年間、どれだけ充実できたかということです。

卒業生の顔を見ると、皆、その点は満足しているようです。
「皆、よかったね。卒業おめでとう。これからもがんばれ！」
心の中で、応援します。

酔っ払い（二〇〇九年五月）

「ブーブーブーブー」
朝、七時の電車の中。
携帯電話のバイブが響きます。
席に座りながら、すっかり熟睡している私。
「朝から何事？」
寝ぼけ眼でメールの内容をチェックしました。

「美代子の学校のブレザー知らない？」
女房からのメールです。
「そんなもの、俺が知る訳ないだろ！」

無視して、再び眠りにつこうとした時、頭の中で、昨晚の情景がフラッシュバックしました。

深酒して午前様の私。

居間のソファーにスーツを脱ぎ捨て、そのまま風呂へ。

上がった後、ボーっとしながら、脱いだスーツを手にししました。

二階の寝室では、女房がすっかり寝入っています。

「起こさないようにしないと・・・」

暗闇の中で、ハンガーにスーツをかけ、そのまま床につきました。

居間のソファーは、娘がブレザーをよく置く所。

「もしかしたら・・・」

不安になって、携帯電話を手にする私。

「昨日着ていたスーツの下を確認してみて」

焦りながらメールを打ちました。

五分後の女房から返信。

まさに不安の中です。

「発見！ しっかりスーツの下にかけてあった(怒)！」
どうやら、スーツと一緒に持って上がって、重ねてハンガーにかけたようです。

これはとんだ大失態！！
「あの飲んだくれオヤジめ！」
女房と娘の顔が目には浮かびます。

これは謝るしかありません。
私はもう一度、携帯電話を手にしました。
「この度は、大変ご迷惑をおかけ致しました。深く反省しております。今後はこのようなことがないように十分に注意する所存でございます。申し訳ございませんでした」

五分ほどして、娘からの返信。
「学校にはギリギリ間に合うから、今回は許すよ」
「……………」
オヤジ＝酔っ払い
この方程式を崩すためには、相当な時間がかかりそうです。

ハナ（二〇〇九年九月）

ついに我が家でも犬を飼うことになりました。
やってきたのは、生後三カ月のミニチュアダックスフンドの「ハナ」。
しつけは、想像以上に大変です。
最初の試練はトイレ。
「トイレはここ！」
いくら教えても、なかなか理解してくれません。
家の中は、ウンコとオシッコまみれで、ひたすら雑巾がけをする毎日が続きました。

ひと月が経ち、ようやくトイレで排泄するようになったのですが、今の問題はその時間。
ハナがウンコをするのは、決まって真夜中です。
黙って寝ていればいいものの、どうやらハナはキレイ好き。
朝まで、ウンコの隣で寝ていることが嫌なようです。

「ウ～～ ワン、ワン、ワン、ワン」

深夜に鳴き声が響きます。

始末をするのは、いつも私。

当然、すぐに寝たいのですが、一度、起きてしまったハナは、ひとりであることが寂しいらしく、私が二階に上がると、また吠え始めます。

「放っておくのが犬のシツケ」

分かってはいるのですが、近所に迷惑はかけられないし……

仕方なくフローリングの上に座布団を敷いて、ハナの傍で眠ります。

朝起きたら、背中が痛いし、腰も痛いし、参ってしまいます。

しかし、それにも増して、ハナはかわいい。

仰向けにひっくり返り、しっぽを振り振り、玄関でお出迎え。

ウレション（嬉しさのあまりのおもらし）をされても、怒るところか、癒されます。

私の携帯電話の待ち受け画面は、ハナの写真。

「親バカだよね～～」

娘から言われる言葉を、素直に受け入れます。

泡盛（二〇一〇年一月）

「何これ？」

二泊三日の出張から帰宅した私。

宅急便で届いた贈り物が目に入りました。

中身を確認したら沖縄産の泡盛です。

「コイデ●●●？」

送り主に、心当たりはありません。

「コイデ●●●って人、知っている？」

「知っているよ」

「誰？」

「ミヨコの彼氏」

「何？」

女房との会話。

ミヨコは高校二年の我が家の娘。

コイデ君は、今、別の高校の二年生。

中学時代から付き合い合っているようです。

私も、娘に彼氏がいることは知っていましたが、これまで見たことも、話したこともありません。

それにしても、何故、娘の彼氏が、私に酒を送ってくるのか？

「コイデ君から酒が届いたんだけど……」

「ふう～ん。で？」

帰宅したミヨコに尋ねる私。

そして、そっけなく答える娘。

「なんで、送ってきたのかな？」

「沖縄に修学旅行に行ったからでしょ」

「……」

どうも話がかみ合いません。

私が聞きたいことは、「なぜ、送ってきたか？」という理由。
最後まで、明確な答は得られませんでした。

「ん～～、今の高校生は何を考えているか分からない……」

友人と飲みながら話す私。

「それって絶対、何かあるよね。来年くらいに、『実はお父さん……』なんて、あらたまって挨拶しにきたりして……」

伊藤さん、オジイちゃんにのなるのは、意外と早いかもね」

「……」

貰ってしまった以上、お返しをしなければなりません。

「さて、何を返そうか……」

頭を抱えてしまいます。

避妊手術（二〇一〇年三月）

先日、ハナが避妊手術を受けました。

「病気じゃないのに手術をさせるのか・・・」

「雌としての大事なものを取ってしまうのは、飼い主のエゴじゃないのか・・・」

正直言って、ちょっと悩みました。

しかし、インターネットを見ると、ほとんどが避妊の推奨派。

避妊をしないと、卵巣腫瘍や子宮蓄膿症等の病気になってしまう危険が大きいとのことです。

さらに、私の気持ちを決定づけたのは、以下の言葉。

「性欲を満たす機会を与えないまま、悶々とさせておくことが、一番かわいそうなこと。

もし、自分が同じ立場だったらどう思う？ 繁殖を考えないならば、少なくとも性欲は無くしてあげましょう」

確かにその通りで、「悶々」だけは勘弁です。

病院から帰宅したハナは、人(犬?)が変わってしまったようです。

すっかり大人しくなり、一日中、ソファの上で居眠りばかりで、見送りの迎えもしません。

「元気出してよ・・・」

悲しい気持ちが募ります。

一週間後の抜糸の日。

トラウマがなのか、車に乗せたら、ブルブル震えるハナ。

「怖いよ～ 怖いよ～ 家に帰ろうよ～」

全身からそんな気持ちが伝わります。

病院の駐車場に着いた時は、パニック状態。

私の腕の中から、必死に逃げようとします。

抜糸はたったの五分で終了。

それまで全身を包んでいた包帯のような服が、一週間振りに脱がされました。

すぐに病院を後にする私たち。

どうやらハナも安心したらしく、帰りの車の中では、落ち着いて居眠りをしていました。

家に着いたら、これまた別人(犬?)。

家中を跳ねまわる姿は、まさに、避妊前のハナそのものです。

しかし、実は心配な点がひとつあります。

帰宅後のハナ。

それまでは、しっかりトイレでオシッコをしていたのに、そこら中で漏らしまくり。

これまで何度、絨毯の掃除をしたことか！

「ストレスがたまっていると、飼い主の気を引くために、わざと悪さをすることがある。ま

あ、そのうち治ると思うよ」

先輩たちは慰めてくれます。

しかし、ある日、インターネットを見ていたら、気になるコメントがありました。

「雌は避妊手術をすると雄化する！」

要するに、ホルモンバランスが変わって、雄のようになってしまうということです。

「そこら中のオシッコは、もしかしたら雄のマーキング行動？ まさか・・・ それは無いよね、

ハナ？」

心なしか、顔がゴツくなった気がします。

がん検診（(二〇一〇年五月)

「伊藤さん、乳腺に光が溜まっていますね。悪性腫瘍の可能性もあるので、もう一度、細かな画像を撮影しましょう」

先日、2年振りにPETを受診しました。

PETとは、「陽電子放射断層撮影診断」のことで、いわゆるガン検診。

ブドウ糖を飲んだ後に、CTで画像を撮影すると、身体の悪いところにブドウ糖が集積し、その部分が光って写ります。

約3時間の検査の後、しっかり画像がとれているかどうかを確認するため、私と女房は、待機室でお茶を飲んでいました。

部屋にいきなり入ってきた白衣の先生。

険しい表情で、冒頭の言葉を発しました。

乳腺の悪性腫瘍と言え、乳ガンのこと。

しかし、先生の視線は、明らかに私に向けられています。

「私ですか？」

「そう、ご主人です」

約30分の再検査。

結果が出るのは、1週間後とのことです。

「乳ガンだなんて、周りの人に言えないよな～」

「そうね・・・ ちょっとカッコ悪いよね～」

「オッパイとるのかな～」

「たぶんね・・・ シリコンでも入れるんじゃないの」

「柔らかくしてどうするんだよ！ それこそサウナにも行けないよ！」

帰りの車の中の会話です。

「病は気から」と言いますが、それまで、全く気にしていなかったのに、検査を受けてから、なんとなく左の乳のあたりに痛みを感じます。

「これは、ひよつとするとマズイかも・・・」

だんだん気持ちが滅入ってきます。

一週間後、病院からの結果が届きました。

封筒を空けるときはドキドキです。

「今のところ、問題なし」

どうやら、単なる炎症だったようです。
とりあえずホッとする私。
おもわず胸ではなく、乳をなでおろしました。
今まで、じっくり見たことがない自分の乳。
妙に愛おしく思えます。

サツマイモダイエット（二〇一〇年五月）

テーブルの上には、山盛りのサツマイモ。
伊藤家の朝の光景です。

実は我が家では、四月から家族全員で「サツマイモダイエット」に取り組んでいます。
「サツマイモダイエット」とは、毎日、一食分の炭水化物を、パンやコメから、サツマイモに変えるというもの。
先日、某テレビ番組で紹介されました。

「明日から、皆でサツマイモダイエットをやるんだけど、お父さんも参加したい？」

「ん？？？」

以前、私が納豆ダイエットに取り組んでいた時に、あれほど馬鹿にした女房と娘。

「この変わりようはいったい何？」

そう思いながらも、ここで不参加を表明したら、村八分(いや家八分)になること間違いなし。

「いいね～、是非、やろうよ」

引きつる笑顔で答えました。

それからというもの、朝はひたすら、イモ、イモ、イモ。

一カ月も続けたら、さすがに飽きてきます。

しかし、意地っ張り揃いの我が家のメンバー。

誰も、自分から「やめようよ」とは言いたしません。

果たして効果はあったのか？

これまで、誰ひとりとして、体重の減少について言及した者はいません。

「効果はどう？」

先日、女房に尋ねました。
「確かに、便秘は無くなった」
「……」
一体、いつまで続くのか。
パンの朝食が恋しい今日、この頃です。

引退試合（二〇一〇年七月）

「お疲れ様でした。カンパ〜〜イ！」
その日は娘の部活の引退試合。
終了後に、お父さんたちだけの飲み会がありました。
「せっかくだから先生も一緒に……」
顧問の先生は、三十代前半の若い男性で、松岡修造のような人。
気持ちは、すごく「熱い」のですが、いつもカラ回り。
これまで何度も、娘たちとぶつかってきました。

「先生、これまでにいろいろ大変だったと思いますが、本当にお疲れ様でした」
労をねぎらうオヤジ達。

しかし、今日に限って、なぜか、しんみりと大人しい先生。

「実は、試合の後、生徒から、こんなものをもらったんですよ」

カバンから取り出したのは、一枚の色紙。

目には、うっすら涙が光っています。

「いろいろと反発してきましたが、今は先生の気持ちが分かります・・・」

「充実した部活動ができたのも、先生のおかげです・・・」

そこには、細かな字で感謝の言葉がいっぱい書かれています。

純粹に感動するオヤジ達。

「いや～、やはり、言うべきことは言わないとダメですね！」

「体当たりでぶつかれば、必ず理解してもらえますね！」

「難しい年頃の娘たちですけど、我々も頑張りましょう！」

「オヤジ達にカンパ～～イ！！！」

何だか、決起大会の様相です。

思いつき盛り上がり、気持ちよく酔っ払って帰宅した私。
「色紙を見たよ。いいこと書いてあったね。先生も喜んでいたよ」
テレビを見ていた娘に声をかけました。
しかし、次の瞬間、耳を疑うような言葉。
「あ～ あれはタテマエに決まっているじゃない。みんな大人だから、ああいうものにどんなことを書いたらいいかは、分かっているから・・・」
「えっ??? ……」
言葉が出ない私。
ス～～と酔いが冷めていきます。
「あの盛り上がりをどうしてくれる？」
無邪気に喜んだオヤジ達の姿を目に浮かべながら、「悲哀」を実感します。

アゲパン（二〇一〇年十月）

「アゲパン気持ち悪いよ」
私に向かって話しかける娘。
「どこで食べたの？」
「はあ？」

我々の世代にとって「アゲパン」と言えば、グラニュー糖がまぶしてあるパンのこと。
食パンがほとんどの給食の中で、「アゲパン」の日は、皆、大喜びでした。

「だからアゲパンをどこで食べたんだよ？」
「パン??? 私が言っているのは、お父さんのズボンのことだよ」
「ズボン？」
「そう、ベルトの位置が高すぎるよ。もう少し下げなよ」

ようやく言葉の意味を理解しました。
しかし、四十年以上も「高い位置」に慣れている私。
当然、下げることには抵抗感があります。
「ベルトを下げるなんて、みっとも無いだろ。国母選手だって、あんなに非難されたじゃな

いか」

「あそこまでしなくても・・・」

「とにかくベルトを下げることはしないから」

そう突っぱねたものの、それ以来、やたらと他人のベルトの位置が気になります。

電車で座っている時は、前に立った人のベルトを自然とチェック。

観察の結果、私のベルトの位置が平均よりも高いことが判明しました。

「ん～仕方がないな・・・」

時代の流れに乗り遅れることは、コンサルタントの致命傷。

ちょっと悔しかったのですが、それまでよりも、三センチほど下げることにしました。

ベルトの位置が下がった分、当然、ズボンの丈は長くなり、。雨の日は裾が濡れてしまいます。

「今度ズボンを作る時には、気を付けないと・・・」

そう心に決めました。

龍馬伝（二〇一〇年十一月）

「ちょっと頼みがあるんだけど・・・」と、いつになく神妙な母。

「何？ どうしたの？」

「実は・・・ ファンクラブに入りたいんだけど、申し込んでくれない」

「ファンクラブ？？？ 誰の？？？」

「福山雅治」

「はあ？ ……」

私の母は、満八十歳。

ケアハウスという食事付の高齢者専用住宅に住んでいます。

話を聞けば、大河ドラマの「龍馬伝」を見て、すっかりファンになってしまったとのこと。

「八十歳でファンクラブとは・・・」

そう思いながらも、インターネットで申し込み、会費の六千円を振り込みました。

その後も行けば福山の話。

CD、DVD、写真集、そしてネットオークションで落札したポスター・・・

今や、母の部屋は「福山グッズ」のオンパレードです。
当然、購入はすべて私。
これまで、どれだけ出費したことか！
まあ、親孝行ですので、私としても嬉しいのですが……

ある日、母の部屋を訪ねたら、オシャレな服を着たり、口紅をつけたり、やたらとオメカシ
しています。

「どこかに行くの？」

「いや、別に……」

「だって、今日は随分、オシャレじゃない？」

「マー君(＝福山雅治)に、汚い姿は見せたくないでしょ」

「……」

「まるで恋をしているみたいですね」

ヘルパーさんからそう言われました。

恋は人を強くするもの。

「目が疲れるから、本は読めない」と弱音を吐いていた母。

三ヵ月ごとに送られてくる、ファンクラブの会報には、しっかり目を通しています。
「ラジオはつまらない」と愚痴っていた母。
毎週日曜日の「福山雅治 トーキングFM！」は、喜んで聴いています。
驚くことに、従来まで「要介護」だった介護保険の判定も、「要支援」になりました。
「龍馬伝」も、いよいよ大詰め。
「もし、最終回に龍馬を殺したら、NHKに苦情の投書をするから！」
「そうは言っても、歴史は変えられないからね・・・」
龍馬が暗殺された後の反動が、ちょっと心配です。

ひとり暮らし（二〇一一年一月）

長女のヨシミは大学2年生。
大学には自宅から通っていますが、しばしば帰宅が深夜になることがあります。
遊びで遅くなるのなら注意ができるのですが、原因は学業とのこと。
専攻が「スポーツ医学」で、トレーナーを目指しているため、部活の世話をしなければなり

ません。

彼女は男子バレー部の担当なのですが、練習が終わるのが夜の十時頃。後片付けをすると、どうしても遅くなってしまいます。

「イタタタタ・・・」

夜中に急に腹痛を訴える娘。

あわてて病院に連れていったら、急性胃腸炎という診断。

「疲れが原因でしょう」と、お医者さんから言われてしまいました。

また、疲れていると、どうしても生活がだらしなくなるし、家族に対する態度がツツケンドンになります。

「あんた、少しは部屋を片付けなさいよ！」

「分かっているから、何度も同じことを言わないでよ。もう、ウザいな～～」

最近、つまらないことで女房と衝突することもしばしばです。

「そろそろ限界かな・・・」

そう思って、娘に「ひとり暮らし」を提案しました。

「少しはためらうかな・・・」と思っていたらとんでもない！

「待ってました！」とばかりに、「そうしたい！」という返答です。
それからというもの、住む場所を探して、買い物をして…
それにしても、まあ、お金がかかること。
ハッキリ言って予想以上です。

買い物している女房と娘は、とても仲良し。
「これがいいんじゃない」「こっちの方がいいよ」
二人とも、ウキウキワクワクという感じ。
ちょっと前の陰悪な状況は一体何だったのか？
娘が出て行くことで、ちょっと淋しい気はしますが、元の姿に戻った二人を見ていて、ホッ
としている私です。

オトコデ（二〇一一年二月）

ひとり暮らしをすることになった長女のヨシミ。

ほとんどの家電や家具は新しく調達し、店舗からすでに配送してもらっています。
だから、「引っ越し」といっても、家から運ぶものは、わずかばかり。
引っ越し業者に依頼するほどではありません。
ということで、私がハイエースを借りて、荷物を運ぶことになりました。

「お父さんは腰が悪いから、無理しない方がいいよ」

「大した荷物は無いから、大丈夫だよ」

「でも、重いものを持ってギックリ腰にでもなったら、仕事に支障が出るでしょ」

「まあ、それはそうだけど・・・」

前日の夜、なぜか、いつになく私の身体を気遣う娘。

「やっぱり男手(オトコデ)が必要だよね」

「ん？」

「一応、助っ人に来るように連絡しておくから」

何だか予期せぬ展開です。

引っ越し当日は、十時に自宅を出発して、十一時に到着。
のんびり荷物を運ぶ用意をしていたら、隣で娘の大きな声。

「あっ ちょうど来た！」
娘が指差す方向から、ひとりの男性が歩いてきます。

「彼がK君」
いきなり紹介されました。
付き合っていることは女房から聞いていましたが、実際に会うのは初めてです。
「いつも、娘がお世話になっています…」
「いえ、こちらこそ…」
妙な空気が流れます。

それから、男ふたりで荷物を運ぶのですが、エレベータの密室空間が息苦しいこと！
「どこに住んでいるの？」
「田無です」
「そう、遠くからわざわざありがとうね…」
女房から聞いて知っているのに、沈黙が苦しいので、仕方なく質問します。

昼食は部屋で、コンビニ弁当。

「お前、部屋はちゃんと片付けろよ！ 自宅の部屋は散らかしっ放しなんだから」
「分かっているわよ。でも、K君の部屋はヒドイよね～ 足の踏み場も無いみたい……」
「まあ男はそんなものだと思うけどさ……」
無理やり会話を続けながらも、「こいつ、いつ彼の部屋に行ったんだ？」と心の中でつぶやく私。

一時前には、引っ越しもすっかり終了です。
「それじゃあ、帰るからね……」
玄関で、娘とK君が見送ってくれます。
その光景は、まるで娘の新婚家庭にやってきた舅(しゅうと)のよう。

「伊藤さん、娘さんがひとり暮らしをしたら、すぐに孫ができちゃうかも知れませんよ」
以前、後輩から言われた冗談が、いよいよ現実味を帯びてきました。

ブライダルキャンドル (二〇一一年三月)

計画停電が決まった三月十三日の夜のこと。
懐中電灯を探したのですが、非常時の備えが悪い伊藤家。
どれも故障していたり、電池が切れていたりで、使える物は、ペンライト1本だけでした。

「そうだ！！」

急に何かを思いついて席を立つ女房。
帰ってきた時に、手に持っていたのは、ブライダルキャンドル。
今から二十二年前の結婚式の時に、式場からもらったものです。
ロウソクには、五十年までの目盛りが書いてありますが、一年目だけ溶けています。
全く記憶に無いのですが、どうやら、結婚一周年の時には、燃やしたようです。
太くて大きなロウソクで、確かに、計画停電にピッタリです。

いよいよ計画停電の予定日です。
ブライダルキャンドルをテーブルの上に置き、じっと電気が消えるのを待つ私たち。
しかし、一向に電気は消えません。
テレビでは、「第一グループの計画停電がスタートしました」のテロップが流れています。

「おかしいな……」

仕方なく、自転車で近所を偵察する私。

確かに近所では、消えている地域もありますが、我が家の周辺は消えません。

理由は定かではありませんが、どうやら近くに、市の消防本部があるからのようです。

「サヨナラ、キャンドル」

数日間、テーブルの上に置いてあったブライダルキャンドルは、いつの間にか、押入の中。

次にお目にかかるのはいつの日か？

見当がつきません。

失恋（二〇一一年五月）

五月二日の夜、事件は起こりました。

その日、女房と長女は、大阪に旅行中で、私と次女が留守番をしていました。

夜七時頃、仕事から帰宅したら、玄関のカギは開いています。
家の中に入ると、今の電気はついているものの、そこにいるのは犬のハナだけ。
娘の姿は見当たりません。
テーブルの上には携帯電話。
「いつも、肌身離さず持ち歩いているのに…」
珍しい光景です。
「今日は、お母さんが作り置きしてくれたおかずがあるから、ご飯を炊いておくね」
私が外出する際に、娘からそう言われたのですが、炊飯器はカラのまま。
「まさか誘拐？」
不安な気持ちがよぎります。

家の外に出てみると、向かいのお宅の若旦那が車の中を掃除しています。
「うちの娘、見ませんでしたか？」
「ええ、見ましたよ。さっき彼氏がやって来て、自転車に二人乗りして、どこかに行っちゃいましたよ」
「あいつ、カギもかけずに彼氏と出て行くなんて、どういうつもりだ！ 帰ってきたら、きつく叱らないといけない…」

米をとぎながら、だんだん怒りが増してきます。

「ガチャ」

三十分経って、玄関が開く音がしました。

「オイ！」

声をかけようと思ったら、「ドンドンドンドン」。

一目散に二階に駆け上がる娘。

「ん ?????？」

ハナも異変を感じた様子で、「ワンワンワンワン」と、二階に向かって吠え続けています。

しばらく待っても、降りてくる気配はありません。

そっと、階段を上がってみたら、真っ暗な部屋からすすり泣く声。

彼氏との間に、何かあったに違いありません。

「何でよりによってこんな日に……」

しばし、部屋の外でたたずむ私。

何か声を掛けようと思うのですが、適切な言葉が思いつきません。

「ん～ 困ったな……」

「ミヨコがピンチ。今、部屋に籠って泣いている。彼氏と何かあったみたい。どうしたらいい？」

仕方なく女房にメールを打ったら、「そっとしておきなさい」の返答。
素直にその言葉に従うことにしました。

その日、娘は彼氏にふられました。

中学時代から四年間も付き合っていた二人。

「ヤンキーだった彼を更生させたのは私だよ」と強気な態度で言い放っていた娘。

まさか彼から「別れ」を切り出されるとは思っていなかったようです。

相当ショックだったようで、その後、全身にストレス性の発疹ができたくらいです。

しかし、「時間」は素晴らしいもの。

辛い気持ちを和らげてくれます。

一週間、二週間・・・

今は、大学生活をエンジョイしています。

飲み会で帰ってくるのが夜中になることもしばしば。

「おまえ、いい加減にしろよ！」
そう思いながらも、口に出せない私です。

新しい彼氏（二〇一一年七月）

「今日帰って来るんだよね。ミヨコが新しい彼氏を連れてくるってよ((驚)」
九泊十日の出張の最終日。
女房からメールが入りました。
ゴールデンウィークに四年間付き合っていた彼氏にフラれたばかりなのに、何という切り替えの速さ！
娘ながらビックリです。

八時半頃、帰宅した私。
「●●●カントです」
スツと立ち上がり、あいさつをする彼。

「あ、そう。私は伊藤で、ミヨコのオヤジです」
微妙に緊張感がただよいます。

その後は、食事をしながら、しばし歓談。
「へえ～、スキー部に入っているんだ・・・」
シーンとしないための、ありきたりの会話が続きます。
そもそも長旅で疲労困憊の私。
翌日は、五時に起きて仕事に行かなければなりません。
「俺はもう寝るから。まあ、ごゆっくり」
寝室に戻って、眠りに入ってしまった。

「えっ??？」
翌朝、ひとり早起きをして、出かけようとした時、私の目に飛び込んできたのは、男物の靴が一足。
カンタの靴であることは、疑いありません。
「泊まったんだ・・・」
動揺しながらも、仕事に向かいました。

「カンタは泊まったの？」

夜、帰宅して女房を問いただす私。

明らかに口調は攻撃的です。

「うん、そう」

「うちは、割とオープンだけど、それにしても限度があるでしょ」

「これから帰っても、寮に入れないうって言うから・・・」

「で？」

「野宿するか、安ホテルに泊まりますって、彼は言ったんだけど・・・」

「で？」

「それって可哀相でしょ。だから、『お姉ちゃんの部屋も空いているし、泊まっていったら』
って言ったんだけど・・・」

「それで、ヨシミの部屋に泊まったの？」

「いや、ミヨコの部屋」

「何で？」

「どうも『お姉ちゃんの部屋も空いているし』ってところが、聞こえなかったみたい」

「……………」

「でも、いいじゃない。カンタ君はすごく良い子だし、ミヨコも元気になったんだから……」
「良い子??？」

女房は妙にカンタの肩を持ちます。
「どうして？」と思っていたら、以下のような「報告」がありました。
その日の朝、二人よりも先に外出した女房。
家に帰ったら、朝食の食器はすべて洗われていて、部屋も掃除してあったとのこと。
さらにテーブルの上には、「おいしい料理、ありがとうございました」の置手紙。
それを見て、女房はすっかり「カンタファン」になってしまったのです。

「娘だけでなく、女房まで手玉にとりやがったか……」
そう思いながらも、「こいつ、結構ヤルな」とも思う私。
もはや怒る気持ちも薄れてしまいました。

それにしても……
付き合って間もない彼氏を泊める娘。
そして、彼女の実家に平気で泊まるカンタ。

「最近の若い者の気持ちは分からない……」
ひとりつぶやく私です。

コンサート（二〇一一年十二月）

「ねえ、ねえ聞いてよ。当たったのよ。当たったの！！」
仕事から帰宅した私に満面の笑みを浮かべながら話す女房。
「何が？ 宝くじでも買ったの？」
「違うわよ。チケットよ。福山雅治のコンサート！！」
「ああ……」

龍馬伝を見て、福山雅治にすっかりハマってしまった私の母親。
八十歳にして、ファンクラブに入会しました。

年に四回会報が送られてくるのですが、一番の目玉はコンサートチケットの優先応募権。ファンクラブの会員は、一般会員と比べて、当たる確率が高いそうです。しかし、母は今、車椅子で生活をしている身であり、さすがにコンサートには行けません。

「だったら、私が応募しようかな。特別ファンじゃないけれど、もったいないじゃない」申し込みの時点では、非常にそっけない態度をとっていた女房でしたが、いざ、当たったら、「大はしゃぎ」です。

「もしかしたら、俺と一緒に行くのかな・・・」一瞬、そんな思いがよぎりましたが、女房は万に一つもそんな気はなかったみたい。すぐに友達に連絡し、一緒に行く約束をとりつけました。そして、待ちに待ったコンサートの当日。女房は、六時半開演というのに、昼過ぎには家を出て行きました。コンサート終了後、友達と二人で、居酒屋で盛り上がり、結局、その日、帰宅したのは終

電でした。

翌朝になっても、まだ興奮が冷めやらない様子。

「三時間半、立ちっぱなしよ！ おかげで、全身筋肉痛・・・」

コンサートの報告が続きます。

「来年も行きたいな・・・ 福山も良いけど、嵐もいいかな・・・」

ひとりごとによろづやく女房。

どうやら、新しい世界に入りこんでしまったようです。

「まあ、これでストレスを解消してくれるなら・・・」

犬と留守番している姿を思い浮かべながら、ひとり納得している私です。

ボランティア（二〇一二年二月）

「私、石巻に行きたい」

「石巻…？」

伊藤家の次女は、今、大学1年生。

ダンスサークルの活動で、朝帰りをすることもしばしばです。

そんな彼女からのいきなり冒頭の言葉がありました。

話を聞けば、同じサークルの親友に誘われて、一週間の被災地ボランティアに行きたいとのこと。

寝袋持参で、風呂に入れるのも週に二回の過酷な生活のようです。

付属高校から受験無しで大学に上がった彼女。

「ちょっと、人生を甘く見ているんじゃない？」

日頃からそう思っていた私からみれば、絶好の機会。

「それは良いことだ！」と喜んで送り出しました。

ところが…

帰京予定日の二日前に。娘から一通のメールが届きました。

「今日は地元の漁師さんに呼ばれて牡蠣祭り。すーんごいおいしい！ ボランティアはあと一週間延長するからね。バイバイ」

「あれ??？」

極寒の地で、泣きべそをかいていると想像していたのに、想定外です。

二週間後によく帰ってきましたが、持っていった寝袋は見当たりません。

「三月にまた行くから、置いてきちゃった」

「……」

農地の耕しや、海での貝殻の回収等々、それなりに仕事はしてきたようですが、今のボランティアは当初と比べて、かなり環境に恵まれているようです。

ちなみに、娘は帰ってきた翌日に、友人とスノーボード旅行に出かけました。
「オイオイ、疲れていないのかよ。 やっぱり人生、甘く見ている」
そう思いながらも、娘の多少の成長を喜ぶオヤジです。

ついていない日（二〇一二年十月）

「ピンポ〜ン。 バシッ！」と、閉鎖した自動改札に思いっきり激突。
思えば、それが不運の始まりでした。

三泊四日の出張から、ようやく戻ってきた私。
最寄駅に着いた時に、前を歩く娘の姿を見つけました。
「一緒に帰ろう」と思い、急いで改札を抜けようとしたら、いきなり「バシッ」。
戻ってみると、「残高不足」の表示が出ています。

「娘はまだ駐輪場にいるかもしれない」
重い荷物を持ちながら急いで階段を下りたのが悪かったのでしょう。
最後の一段を踏み外し、足首を「グキッ」。
「イタタタタタ…」
完璧な捻挫です。
駅の外を見れば、雨がちょうど降りだしたところ。
「クソッ」
濡れて帰るしかありません。

雨の中、自転車を飛ばして、ようやく帰宅。
すぐに家の中に入ろうと思ったら、カゴの上に置いた鞆が持ち上がりません。
よく見たら、カゴの金具に鞆のファスナーが、引っかかっています。
「ウソッ」

いくら直そうと思っても手では無理。
仕方なしに、工具を取りに行き、雨の中での作業です。
結局、大切に使っていたカバンのファスナーを壊してしまいました。

「バシッ」「ゲキッ」「クソッ」「ウソッ」

全て、たった20分の中の出来事。

「悪いことは重なるもの」

よく言われることですが、確かにその通りでした。

そういえば、その日の朝のめざましテレビの占いでは、私の射手座が最悪でした。

「まあ、大事に至らなかっただけでも良かったか・・・」

自分に言い聞かせました。

実家への訪問（二〇一二年八月）

「来週は戻って来ないよ…」

「そう、どこか出かけるの？」

新聞を読みながら、女房と娘の会話に耳を傾ける私。

「うん。K君の実家」

「実家？」

伊藤家の大学四年の長女は下宿中。

就活もひと段落し、今は暇を持って余している状態で、一週間に一回程度、自宅に戻ってきます。

ちなみに、「K君」は、部活の仲間で、いわゆる「カレシ」。

これまで何回か我が家に遊びに来て、一緒に食事をしたことがあります。

「K君の実家って奈良じゃなかったっけ？」

「そうだよ。京都観光をした後に行くことにしたの・・・」

女房と娘の会話を聞いていて、だんだん新聞の字が頭に入らなくなってきます。

「そう、それじゃあ、お土産持って行かないとね・・・」

「何が良いかな？」

「ラスクが良いんじゃないの。日持ちもするし・・・」

「あれ？ 何で土産の話なんかで盛り上がっているの？ 母親だったら、『何しに行くの？』

とか、『どこ泊まるの？』くらいの突っ込みを入れろよ！」

そう思いながらも、自分では突っ込めない私。

新聞は五分間、同じページを開いたままです。

「お父さん、今の時期って新幹線混んでいるかな？」

いきなり話を振ってくる娘。

「夏休みだからな・・・ 混んできると思うよ」

「じゃあ、自由席では座れないかもね？」

「そうだろうな・・・」

「予約した方がいいよね」

「そうだろうな・・・」

「そう言えば、お父さん、いつもインターネットで予約しているって言っていたよね」

「ん？ まあ、そうだけど・・・」

「だったら、私のために、予約してくれたら嬉しいんだけど・・・」

「ん？ まあ、それはできるけど・・・」

何と上手な説得話法！

まさに、以前読んだ「ハーバード流交渉術」に書いてあった「YES－YES－YES」と話をつなぎ結論に結びつけるやり方です。

仕方無しに、パソコンを開く私。

娘は更に追い打ちをかけます。

「確か、ネットで予約した時のクレジットカードが無いと発券できないよね」

「そうだけど・・・」

「お父さん、明日、仕事で都内に行くでしょ」

「まあ、行くけどね・・・」

「だったら、悪いけど、発券もお願いね」

「……………」

翌日のこと。

私の手には、「東京⇄京都の往復切符」。

「何で俺がこんな切符を持っているのかな・・・」

ひとりつぶやくオヤジです。

誕生日（二〇一二年十二月）

十二月十一日に、ついに五十代に突入しました。

「五十歳・・・」

社会人になった時の「五十歳」の方々は、まさに雲上人。

自分とは、全く世代が異なる「別次元の人たち」と思っていました。

しかし、いざ自分がその年齢になってみると、全く実感がありません。

だから、誕生日を迎えても、何の感慨も無かったのですが・・・

当日、仕事を終えて帰ってきたら、ダイニングテーブルの上に、きれいにリボンがかかった箱がひとつ置いてありました。

「お父さん、ハイ、これ」

「ん？」

「半世紀生きてきたお祝い」

「あ、どうも……」

娘から誕生日プレゼントをもらったのは、たぶん、幼稚園以来です。

少し、照れながら包みを開ける私。

古びた木箱の中には、一本のワインが入っていました。

「何か気づかない？」

「はあ？」

「もう、本当にお父さんは鈍いよね」

「……」

「ワインの年を見てみなよ」

そこには、「bottled in 1962」の文字。

「お父さんと同じ五十歳のワイン。なかなかオシャレでしょ」

「ほう……」

「十年後は赤いチャンチャンコだね」

「……」

さて、一体、このワインはいつ開けることになるのでしょうか？

「もしかしたら、娘の結婚式の日？」

そんな気がします。

自動車運転（二〇一三年三月）

「今日は、私が運転して帰るよ。代行屋さんを呼ぶのも、勿体ないでしょ」

「ん？？？」

「お酒は飲んでいないから大丈夫」

家族で食事に行った時、いきなり娘から申し出がありました。

我が家の長女は大学四年生で、今年の四月に就職です。
医療機器メーカーの営業職なので、車を使って移動することもあるようです。
一応、大学二年の時に免許は取得したものの、その後、全く運転していない娘は完全な
ペーパードライバー。
さすがにこのまま就職することは不安らしく、どこかで少し練習したかったようです。

結構飲んで、思考回路がマヒしている私。
「それじゃあ、任せた。よろしくね」
気軽にカギを手渡しました。
会計を済ませて車に戻ると、女房と次女がすでに後部座席に乗り込んでいます。
「あ～～、俺が助手席なのね・・・」

運転席の娘の横顔は、明らかに緊張でこわばっています。
座席を思いっきり前に出し、額がフロントガラスにくっつきそうです。

「ブオー——ン」と、いきなりの空ぶかし。
ギアがニュートラルに入っていることを忘れています。

「オイオイ、大丈夫かよ……」
次第に不安になってきました。
ゆっくり、ゆっくり駐車スペースを出る車。
いよいよ公道に入ります。

「よし、今だ、今、今！！！」
車の中で大合唱。
「右は大丈夫。今だったら車線変更できるよ！！！」
私だけでなく、女房や次女も、いちいち指示を出します。
「ウルサ～～～イ！ 集中できないから黙っていてよ！！！」とキレル娘。
「……………」

車内に沈黙が続きます。

「おう」「あっ」「ふう」

たまに発せられる、言葉にならない音、音、音。

静けさが、余計に緊張感を高めます。

十分後、ようやく家に到着した時は、すっかり酔いが醒めてしまいました。

「どう？ 結構、上手だったでしょ」

「ん～～、まあな……」

曖昧な返事しかできない私。

「就職前にもう少し練習したいから、また付き合ってね。今度は高速道路がいいな……」

「……」

助手席で沈黙している自分の姿を想像するだけで、胃がキリキリ痛みます。

熱海行き（二〇一三年四月）

茅ヶ崎での仕事を終えた私。

連夜の深酒がたたたり、疲れ切っていました。

「帰りは、ゆっくりグリーン席で帰ろう」

九五〇円のプチ贅沢です。

ポ〜とホームで待つこと一〇分。

ヨタヨタしながら電車に乗り込みました。

駅の自動販売機でスイカにグリーン券情報を登録し、電車に乗って、座席の上のスイッチにタッチします。

「ん？」

普通はランプが赤（＝空席）から緑（＝在席）に変わるのですが、。今回は席についてタッチしても、ずっと赤のランプのまま、一向に緑になりません。

隣の席の若い女性が興味深く、私の姿を見えています。

「何だか壊れているようですね・・・」

そうつぶやきながら、タッチをあきらめ、睡眠モードに入りました。

「すみません。この席はグリーン料金がかかります」

女性の車掌さんが声をかけてきました。

「知っていますよ。さっきからタッチしているのに全然反応しないんです。きっと壊れていますよ」

ちょうど寝入ったところを起こされた私。

言葉には、明らかにトゲがあります。

「ちょっとスイカを確認してもいいですか？」

ピピピピピピと、何やら端末を操作しています。

「どちらまで行かれますか？」

「新宿ですけど・・・」

「新宿ですか～～ この電車は熱海行きですが・・・」

「熱海????」

どうやら乗り込んだ電車が逆だったようです。

「次の駅は????」

すっかり眠気が醒めました。

「コウズです」

「コウズ・・・ ってどこ？」

隣の席の女性は、肩を震わせ、必死に笑いをこらえています。

二〇分後、ようやくコウズに到着しました。

駅の人影はまばら。

上り電車が到着するまで三〇分。

ひとり静かに待つホーム。

「カッコ悪い～～～」
思わず叫んでしまいました。

ハナのしつけ（二〇〇三年六月）

ある日、自宅で仕事をしてたら「ピンポ～ン」。
玄関のチャイムが鳴りました。
「ワン！ワン！ワン！ワン！ワン！ワン！ワン！ワン！ワン！！！」
ハナが異常に興奮します。
「どなたですか？」
インターフォンで話そうとするのですが、ハナの鳴き声が煩さ過ぎて、全く会話になりません。
仕方なく玄関の扉を開けてみたら、そこには二人の初老の女性が、にこやかに微笑みな

がら立っています。

「我々、倫理を研究しております。少しお話をさせていただきませんか？」

「いや、いや、特に興味はありませんので・・・」

「そう言わずに、少しだけで良いので・・・」

「いや、うちは仏教なので・・・」

「倫理に宗教の区別はありません。そもそも仏教とは・・・」

追い返そうと思っても、なかなかシブトイ。

「すみません。バタン！」

最後は私が強引に扉を閉めて終了しましたが、何だかんだで五分近く経っていました。

部屋に戻ると、ハナは何事も無かったように、ソファで寝そべっています。

「ハナ！ お前が吠えるから悪いんだ！！」

イライラして、叱りつける私。

「このバカ犬。こうなったら、もう一度、徹底的に教育してやるからな。覚悟しろ！」

善は急げということで。即座にインターネットを立上げ「犬のしつけ」のDVDを購入しました。

三本セットで一万円以上もする「本格版」です。

三日後に到着し、やる気満々でDVDをスタートしてみると・・・

「皆さん、自分の犬をバカ犬だと思っていないか？ 悪さをした時に叱りつけたりしていませんか？ 犬が問題行動を起こすのは、それは全て飼い主の問題です・・・」

「え？ もしかして見ていたの？」

トレーナーの語る言葉は、全て我が家に当てはまります。

思えば、仔犬の頃から、躾らしいことはほとんどしていません。

ちょっとトレーニングをしても、我々に根気が無いので、すぐに止めてしまいました。

まあ、確かに、これでは利口になれと言われても、難しいでしょう。

なんだか、自分が叱られている感じです。

「悪かったな。俺も反省するからさ。もう一度、ちゃんとやってみようか？」

となればいいのですが、一気にやる気が失せてしまった私。

それ以降、DVDはずっと埃をかぶったままです。

老眼（二〇一三年七月）

「私もスマホを買うから。今度の日曜日に付き合ってね」

「ん？ まあ、良いけど・・・」

これまで、昔ながらの折り畳み式の携帯電話を使っていた女房。

ついにスマートフォンに買い換えました。

きっかけは「ライン」。

実は最近、娘が「伊藤家」というグループを作りました。

「今日は家にいるの？」とか「ハナの散歩をよろしく」とか、たわいも無い連絡が中心ですが、メンバーは娘二人と私の三人。

ガラ携を使っている女房は入れません。

「何で私が伊藤家のメンバーに入れないの！ それって仲間はずれでしょ！」

「仕方が無いだろ、携帯なんだから」

「じゃあ、私もスマホにする！」

これまで、「携帯で十分」と言っていたのに、豹変しました。

次の日曜日に近くの量販店に行き、いざ購入。

しかし、契約書を書いている女房の手が、なかなか進みません。

「ねえねえ、ここ何て書いてあるの？」

「はあ？」

見ると、生年月日を記入する欄に、小さく、「大正」「昭和」「平成」と書いてあります。

それを丸で困むのですが、この文字が見えないようです。
最近、新聞を読む距離がめっきり遠くなってきた女房。
明らかに「老眼」なのですが、私よりも先に老眼になることはプライドが許さない様子。
頑なに老眼鏡を作ることを拒んでいます。

さて、苦労して買ってきたスマホ。
いろいろいじっているのですが、どうも使い難いらしい。
「ん～ 字が小さくて読み難いしたらありやしない……」
思いつき手を伸ばして操作しながらブツブツつぶやいています。
「早く老眼鏡を買った方がいいじゃない？」
心の中で笑っている私です。

スマホの追跡（二〇一三年十一月）

地方出張のついでに、昔の会社の同期の仲間とゴルフをする予定の私。
最近、全くクラブを握っていなかったので、久しぶりに練習場に向かいました。
ボールは右に行ったり、左に行ったり・・・
「週末のゴルフが思いやられるな・・・」
不安な気持ちで帰宅しました。

「そろそろ出張の用意をしよう」と、服や資料を次々、鞆に詰め込みます。
「そう言えば、スマホが見当たらないな・・・」
充電器を手にした時、ふと気づきました。
どこでも置きっ放しにする私にとって、家でスマホを無くすことは日常茶飯事。
そういう場合は、女房のスマホを借りて検索します。
まずは、一番可能性が高い2階から。
スマホに電話をした後、耳を澄まします。

マナーモードになっていますが、「ジー」という音は確認できます。
しかしながら、音沙汰なし。
1階も車の中も同様に搜索したのですが、やはり見当たりません。

「あ！！！！！」

その時、ある光景が私の頭の中にフラッシュバックしました。
それは、練習場で財布とスマホをゴルフバックのポケットに入れたこと。
帰りがけにコンビニでそのバックを宅急便で送りました。
その時、財布は取り出したのですが、スマホは・・・
「まずい、バックの中だ！！！」
すぐに車のエンジンをかけ、そのままコンビニに向かいました。
店の二百メートル前で、クロネコのトラックとすれ違いました。
嫌な予感です。

「すみません。先ほど宅急便をお願いしたゴルフバックは？」

「たった今、集荷されてしまいました…」

予感的中です。

結局、その後、ドライバーの連絡先を聞いて、集荷場でようやく受け取ることができました。

「ただいま」

「ずいぶん長い検索だったね。私、ケイタイが無くて困っていたんだけど…」

隠し通すこともできず、事の顛末を伝える私。

「バカみたい…」

そんなこと、言われなくても分かっています。トホホホホ。

人間ドッグ（二〇十四年二月）

「こちらで、着替えてください」

案内係の方に通されたのは、ホテルの一室のような綺麗な部屋。

「アロマオイルマッサージで産後の疲れを癒してみたいはいかがですか？」

机の上には、一枚のチラシが置いてあります。

年に一度の人間ドック。

「今年は近場の病院にしよう」

インターネットで検索して、写真が綺麗だった、S病院を予約しました。

当日の朝、玄関を入ってみると、なんか少し違和感があります。

「人間ドックで来たのですが・・・」

総合受付で、尋ねてみたら、「それでは、婦人科で受付してください」という回答。

「え????」

どうやら、このS病院は、婦人科を専門にしている病院で、一応、内科の看板も出してい

るものの、患者のほとんどは女性の様子。
話を聞けば、人間ドックを受診する人は非常に少なく、特に男性は、稀の稀とのこと。パジャマのような診察服に着替える場所も特になく、今回私は、産後に入院する部屋をあてがわれました。

「まずは、血圧から測りましょう」
係の方に連れられたのは、婦人科の待合室。
部屋の片隅に置いてある血圧計で測定しますが、当然、周りは女性ばかりです。
衆人環視の中、パジャマ姿で腕をまくりあげる私。
上の血圧が140で、脈拍も65。
緊張のせい、これまでに無い高い数字です。

レントゲン、心電図、エコー・・・
その後もパジャマ姿で、病院の中を行ったり来たり・・・

入院している女性の方に会釈をされると、何だか気恥ずかしい気持ちになります。
ちなみに、エコーは、通常、妊婦さんが胎児の様子を確認する部屋でした。

「お疲れ様でした。 サンドイッチがありますので、どうぞ」

何だか妙に疲れながら、最初の部屋に戻ってきました。

「15分くらい経ったら、お迎えが来ますから。 そのままの格好で待っていてください」

「着替えなくていいのですか？」

「ハイ。 アロマオイルマッサージがありますので」

「え??？」

「ここの人間ドックでは、最後にマッサージがついています。 気持ちいいですよ～～」

係の方は、明らかに私の狼狽を楽しんでいます。

アロマの香りが漂う小部屋で、上半身裸になりながらベッドに横たわる私。

温かいオイルが肌に塗られます。

「気持ちはいかがですか？」
「え～～、気持ちは良いですが・・・」
最後まで緊張しっ放しのドックでした。

仮面ライダー（二〇一四年四月）

大学生の次女は、今、ダンスに夢中。
将来はダンス関係の仕事に進みたいと、本気で考えています。

「仮面ライダーに出ることになった。リクさんから出て欲しいって頼まれたから・・・」
食事中に、いきなりの爆弾発言です。
話を聞けば、彼女のダンスの先生が仮面ライダーに出演することになり、一緒に出る仲間を募っているそうです。

「仮面ライダー」と言えば、我らのヒーロー。
私も小学生の頃は、「仮面ライダーカード」を何百枚も持っていました。
しかし、なぜ、仮面ライダーにダンサーが出演するのか？
唯一、イメージできるのは「ショッカー」くらい。
娘が、頭から黒いレオタードをかぶった悪役になり、「キーー」と叫ぶ姿を想像しました。

いざ当日、テレビの前でスタンバイする女房と私。
さあ、仮面ライダー鎧武のスタートです。
ちなみに、娘はダンスチームのメンバー役で、私が期待していた「ショッカー」ではありませんでした。
目を凝らして見ていたのですが、放送中は、どこに登場しているのか全く分からず…
仕方が無いので、今度は録画をスロー再生してみました。
「あっ、いた！」と叫ぶ女房。

結局、三十分間の番組の中で、映っていたのは三秒くらいでした。

それでも、本人はとても嬉しかった様子。

「これは永久保存版だから消さないでね・・・」

翌日に釘を刺されました。

一週間後のこと。

私が出張から帰宅すると、玄関先に見慣れない「杖」が置いてあります。

「何これ？」

「ミヨコの杖。 仮面ライダーで張り切り過ぎて、腰を痛めたんだって。

昨日、私が駅の近くの介護用品店で買ってきたのよ。 今日この杖について、学校に行つたんだけど、ホントに馬鹿ね～～～」

苦笑する女房。

どう見ても、その杖は二十代の若者が持つようなデザインではありません。

「仮面ライダーの代償がこの杖・・・ まあ、これも青春の1ページなのかな・・・」
私も思わず笑ってしまいました。

娘の友達（二〇一四年五月）

五月三日に、フミカと、チーちゃんと、マイが家に泊まるから。たぶん、六時くらいに帰ってくると思うから、夕飯よろしくね」

ゴールデンウィークに我が家の近くで、子供たちによるダンスイベントがありました。
主催は、次女が通っているダンススクール。
娘を含めたスクール生が、アルバイトとして運営を手伝うことになったそうです。

「こんばんわ～～ お邪魔しま～す」と、やって来た女子は、まあ見事なギャルばかり。

茶髪にメイクがバッチリです。

私は一瞬たじろぎましたが、少し話をしてみたら、とてもしっかりしている彼女たち。

「これ、皆さんで食べてください」なんて気遣いもしてくれて…

「見かけによらず、良い子たちじゃないか」

今時のギャルを、ちょっと見直しました。

食事を出したら、食べる、食べる、食べる。

山盛りのハンバーグとから揚げを、あっという間に平らげました。

「ごちそうさまでした～～」

食事の後は、娘の部屋でワイワイガヤガヤ…

深夜の二時くらいまで続いていました。

「若いっていいなあ～～」

我が青春の日々を思い出し、少し羨ましくなりました。

翌日の夕食時のこと。

「ねえ、ねえ、聞いてよ。彼女たち、本当にバカなんだよ～」

娘が楽しそうに話します。

「うちの家って、全面禁煙じゃない。でも、チーちゃんとマイはヘビースモーカーで、夜中に、どうしてもタバコを吸いたくなつたんだって」

「ほう～」

「それで、どうしたと思う？」

「分かんないよ……」

「うちがシャワーを浴びている時に、窓から屋根に降りて、そこで吸っていたんだって。

ホント、笑っちゃうよね。ハハハハハ……」

「……………」

返す言葉が見当たりません。

ハナの悪戯（二〇一四年六月）

「明日の夜は、家にいるから、夕飯は家で食べられるよ」
二泊三日の出張中の私に、女房からメールが届きました。
「ん、何で？ 福山のコンサートじゃないの？」
「事情があってキャンセルした」
「あ～そうなの・・・」

ここ数年、女房がハマっている福山雅治。
例年、年末のコンサートに行くのですが、今年は気合が違います。
さいたまスーパーアリーナで開催される春のコンサートチケットをゲットしました。

コンサートの当日は、私がちょうど出張から帰宅する日。
「コンサートの帰りは遅くなるから、ハナちゃんよろしくね。食事は適当に外で済ませてき

てね」

「ハイハイ、了解です。」

出張の前夜にそんな話をしたはずです。

「何でキャンセル？」

意味が分かりません。

「福山が病気にでもなったのかな・・・」

ネットで調べてみても、そんなニュースはどこにも書かれていません。

翌日、帰宅したら、その理由が判りました。

原因はハナ。

コンサートの前日の朝、女房が鳥のモモ肉を食卓の上に置いていたら、何とハナが椅子を使ってよじ登り、全部食べてしまったとのこと。

その量は何と三百グラム！

体重三キロのハナにとっては、とんでもない量です。

さらに悪いことには、そのモモ肉は、ネギと一緒に煮込んだもの。

犬にとっては、ネギは大敵で、たとえエキスであっても、中毒になる可能性があります。

慌てた女房は、動物病院に直行しました。

そこで先生に言われたことは・・・

「たぶん大丈夫だと思いますが、二、三日は様子を見た方が良いでしょう。体調が急変することがありますから。もし、そうなったらすぐに連れてきてください」

もし、コンサートに行くと、私が帰宅するまでの数時間、ハナはひとりぼっちになってしまいます。

それは、さすがに危険なこと。

そこで、やむなくコンサートをキャンセルしたそうです。

当日の女房の落ち込みは、傍から見ていて可哀想でした。

「あ～あ、良い席だったのに・・・ でも、仕方が無いよね。私が悪いんだから・・・」

自分に言い聞かそうとしています。
「まあ、年末にまた行けばいいんじゃないの」
妙に優しい私でした。

スカウト（二〇一四年八月）

「今日、スカウトされちゃった」
「スカウト？ どこかの芸能プロダクション？」
「いや違う」
「どこ？」
「フィリピンパブのダンサーになりませんか？ だって」
「はあ????」

コンビニで雑誌を立ち読みしていた娘。
いきなり、男性から話しかけられたそうです。
普通の水商売ならまだしも、よりによって「フィリピンパブ」とは……
確かに、色は黒いし、顔立ちも東南アジア系であることは認めます。
しかしながら、スカウトマンもプロのはず。
生粋の日本人をフィリピン人に間違えるのは、さすがに、「それはないでしょ！」って感じ
です。

しかし、思い起こせば三十年前、私が一人でアメリカを旅している時のこと。
大陸横断バスの中で、見知らぬ男性から声をかけられました。
「○×△□…… △□×○……」
何を言っているのは、全然、分かりません。
ポケー——としていたら、相手の表情が変わりました。
私に話しかけてきた人は、ベトナム人。

同郷の人だと思ったらいいです。
女房も、どちらかと言うと、東南アジア系の顔をしています。
やはり、「カエルの子はカエル……」なのでしょう。

数日後のこと。

「また、スカウトされちゃった」

「今度は何？」

「日本語弁論大会に出ませんか？ だって。ハハハハハハ」

「……」

一週間に二度も外国人に間違えられたら、これは、「本物」でしょう。
「伊藤家の血を薄めるためには、是非、西欧系の人と結婚して欲しい……」
切に願います。

クラシックコンサート（二〇一四年十一月）

「ジャン、ジャン、ジャ〜〜ン」

ホールを揺らす大音量が心臓まで響きます。

先日、お客様から、クラシック系のコンサートのチケットをいただきました。

日頃から、「芸術」とか「文化」には無縁の私。

「この機会に新しい趣味を作るのもいいかも・・・」

喜んで聴きに行くことにしました。

「お父さんがクラシックなんて言うから、台風が来るんじゃない！」

娘たちから、散々からかわれる私。

しかし当日は、台風一過の良い天気。

「ざまあみろ・・・」

ビシッとジャケットを着こんで出かけました。

クラシック系のコンサートは、中学生の時以来。
コンサートホールの荘厳な雰囲気には圧倒されます。
招待席ということで、前から八列目の素晴らしい場所。
演奏者の表情までしっかり見えます。

「ジャン、ジャ～～ン」

演奏は、それは見事なもの！

思わず引き込まれてしまうのですが・・・。

悲しいかな、そういう場に慣れていない私。
三十分くらい経過した頃から、大音響が子守唄に聞こえてきます。
「せっかく、ご招待いただいたのに、これではイカン！」

気合を入れ直して、身を正します。
ふと隣を見たら、女房の目は2ミリくらいに細くなっています。
肘でつついてやりました。

「お前、寝てただろ」
「あんただって、三回くらい意識無くしたでしょ」
帰りがけに食事をしている時の夫婦の会話。
どっちもどっち、五十歩百歩、目糞鼻糞です。

「福山雅治のコンサートは、ずっと立ちっ放しだから眠くならないんだよね～～」
意味が分かりません。

縄文土器（二〇一四年十二月）

「なんだか、縄文土器みたい・・・」
「ん～、砂漠のカメレオンって感じかも・・・」

近くのスーパーに買い物に行くために着替えてきた私。
その姿を見て、女房と娘がつぶやきました。
茶色のズボンに茶色のセーター。
確かに靴下も、靴も茶色です。
それにしても・・・
「縄文土器とか砂漠のカメレオンは言い過ぎでは・・・」
デリカシーの欠片もありません。

「やっぱり、お父さんは服装のセンスがゼロだよね」
「明日、お父さんの変身大作戦を決行しよう！」

ということで、翌日、私は入間のアウトレットパークに連行されました。

「これ、どう？」

「ん～、さすがにちょっと若すぎるんじゃない？」

「歳をとったら、思い切って若い恰好の方が良いんだって」

服を選びながら盛り上がる母娘。

もちろん、私には何の選択権也没有せん。

「ちょっと着てみて」

何度、試着室を往復したことか！

まさに、「着せ替え人形」です。

ズボン、シャツ、セーター、アウター(外衣)・・・

三時間後、ようやく見立てが終了しました。

「じゃあ、しばらく解散して、二時間後にここに集合ね。お父さん、お小遣いちょうだい」

「ん？」

「当然でしょ。コーディネートしてあげたんだから」
ようやく真意がつかめました。

家に帰って、下の娘も加わり品評会。

「まあ、こんなものかな・・・」

上から下まで、コーディネートされた私を評価します。

「こんなもの？」

その言葉に、やや引っ掛かりながらも、鏡の姿を見て、まんざらでもない気がします。

鼠径ヘルニア（二〇一五年四月）

先日、鼠径(そけい)ヘルニアの手術を受けました。

鼠径ヘルニアは通称、「脱腸」。

「ヤ～イ、ヤ～イ、ダッチョ！ ダッチョ！」

幼い頃に、意味もわからず相手をバカにする時に使っていた言葉。

まさに、あの「ダッチョ」です。

この病気は子供の頃になるものというイメージが強いですが、成人でも毎年十五万人くらいは患者がいるそうです。

原因は腸が筋膜の間から皮膚の下に出てくることで、自覚症状は患部の張り痛み。

ちなみに患部は、股間から上に十センチ、右に三センチくらいの場所です。

医療技術が進歩した結果、手術と言っても簡単なものです。

患部を三センチくらい切開して、出てきた腸を押し込んで、特殊メッシュで蓋をして、切開箇所をくっつけて、ハイ終了。

日帰り手術で、私の場合は十時半に病院に入り、十五時頃には退院しました。

病気にあまり慣れていない私にとって、今回は、いろいろな「初体験」がありました。

まずは、剃毛。

「シモの毛を処理しましょうね」

場所が場所だけに、覚悟はしていましたが、「やっぱり」でした。

ジョリ、ジョリ、ジョリ、ジョリ・・・

バリカン片手に、表情を変えずに黙々と処理する看護師さん。

30代半ばくらいの女性です。

いや～ 恥ずかしいのなんのって！！！！

次は全身麻酔。

正確には、患者をグッスリ眠らせた後に、患部に局所麻酔を打つのですが、患者的には「全身麻酔」そのものです。

「ハ～イ ゆっくり息を吸い込んでください」

手術台に乗って十秒程度で気を失い、一時間後に目が覚めた時には、病室のベットの上

でした。

自宅で夕飯を食べたら、急に気分が悪くなりました。
マズイと思って、トイレに駆け込もうとしたら、途中で目の前が真っ暗。
生まれて初めての貧血です。
ダラダラ汗を流しながら、十分間、その場にうずくまっていました。

麻酔が切れたので、ベッドに入っても、痛みでなかなか寝つけません。
仕方無しに、処方してもらった「坐薬」のお世話になりました。
お尻から薬を入れるなんて・・・
これまた初体験です。

手術の翌日はさすがに仕事を入れませんでした。翌々日は朝から仕事。
まともに歩けないので、初めて杖をつけて出かけました。

私の辛そうな姿を見て、今回ばかりは、さすがに女房もいたわってくれました。
しかし、それも三、四日。
私の回復を見届ければ、それでオシマイ。

「去年はナンチョー((難聴)、今年はダッチョー((脱腸)。お父さん、ちゃんと韻を踏んで
いるよね」

「……」

「さて、次は一体、何でチョー？ ハハハハハ」

オヤジギャクならぬババアギャク。

「いつか絶対に仕返ししてやる……」

心の中で誓いました。

プロポーズ (二〇一五年八月)

「K君と結婚することにしたから……」

娘から突然言われたのは、1ヵ月前のこと。

今回のK君の訪問は、その、あいさつのためです。

これまで、我が家に何回か来たことがありますが、今回は全身がガチガチという感じ。緊張感が滲みでています。

とりあえずの夕食。

「いつ切り出すのかな……」

そう思いながら、だんだん私のアルコールのピッチが速くなります。

結局、酔っ払ってしまって、夕食後ソファで寝入ってしまいました。

「ちょっと、お父さん起きてよ」

一時間後に娘から肩を叩かれました。

ダイニングの椅子には、一層、ガチガチになったK君が座っています。

「ヨ、ヨ、ヨ、ヨシミさんと結婚させてください……」

ついに、「その時」が来ました。

相手が緊張していると、こちらも、その緊張がうつるもの。

「こ、こ、こちらこそ、よろしくお願いします」

いろいろな話をするつもりだったのですが、結局、何も話せませんでした。

K君と娘は大学時代の同級生で、卒業して3年目です。

今、職人を目指して修行中なので、給料もわずかです。

新居は、昭和の時代に造られた家賃2万円の町営住宅。

下見をしたら、換気扇から油が垂れてきたり、風呂場は小蠅の棲家だったり……

なかなか大変そうですが、「極貧」から始めるもの悪くないでしょう。

若き二人に幸あれ！

心からそう思っています。

てあしくちびょう（二〇一五年八月）

ある日、手のひらを見たら、所々に赤い斑点が見られました。

「何かにかぶれたかな？」

痛くも痒くも無いので放っておいたら、毎日毎日、どんどん斑点の数が増えていきます。

風呂に入って足を見たら、同じような斑点がいっぱいあります。

「何これ？」

気持ち悪くなって、近所の皮膚科に行きました。

「あ～ これは、てあしくちびょうですね」

「てあしくちびょう？」

「そう、手足口病です」

手足口病というのは、通常、四歳くらいまでの乳幼児がかかる病気。夏風邪の一種で、名前の通り、手と足と口の中に発疹ができます。一般的な病状としては、発疹の他は、頭痛、嘔吐、発熱等。特に治療方法が無いので、ガマンするしかありません。通常、十日くらいで自然治癒します。「そう言えば、少し前、熱っぽかったことがあったな・・・」心当たりがありました。

それにしても、御年五十三歳の私が何でこんな病気にかかるのか？「きっと、子供にうつされたのでしょう」お医者さんは、そう言われましたが、そもそも、我が家にはそんな子供はいないし、また、子供が集まる場所に出向いたこともありません。感染経路は全くの謎です。

家に帰って女房に話をしたら大爆笑。

「パパが手足口病にかかりました！（笑）」

LINEで二人の娘に伝えます。

「いや～、パパはやってくれますね～。この前は脱腸で、今度は手足口病。さすがに若い！ というよりも若い！（笑）」

またまた、笑いのネタを提供してしまいました。

「あんた、どこかに隠し子でもいるんじゃないの？ 最近、出張が多いけれど、本当にホテルに泊まっているのかな？？？」

女房からは、あらぬ嫌疑をかけられる始末。

「……」

返す言葉がありません。

そもそも、「てあしちびょう」という名前が悪いですね。

なぜ、もう少し気が利いた病名をつけられなかったのか？

脱腸(ダッチョウ)だって、鼠径ヘルニア(ソケイヘルニア)という、それらしい名前があるのに…

「てあしくちびょう」は、全くの「そのまんま」。

あまりにも恰好が悪すぎです。

命名者を恨みました。

ワンダーコア (二〇一五年九月)

酔っ払って帰宅すると、ついつい見てしまうのがTVショッピング。

ある日のこと、テレビをつけると、ナイスボディの男性が、妙な器具を使って腹筋運動をしていました。

バネがついている背もたれを後ろに倒しながら楽々とこなしています。

その器具の名は、「ワンダーコア」。

「楽そうに見えますけれど、実は通常の腹筋よりも効いているのですよ・・・」

最近、風呂上りの自分の姿を見て情けなく思っていた私。

その言葉は、深く心に焼きつきました。

翌朝のこと。

「昨日、TVショッピングを見ていたらさ～」

「ん？ 健康関連だったら絶対ダメよ。どうせ続かないんだから」

さすがに二十五年も連れ添っている女房。

心の中が見透かされています。

思えば、これまでいろいろな物を買いました。

家の中で楽々できる「ランニングマシーン」。

超音波で腹筋がブルブル震える「アブトロニクス」。

胃の中でバリアを形成し、カロリーの吸収を抑える「スリムドカン」。

その他いろいろ・・・

確かに続きませんし、効果もありませんでした。

「あきらめるしかないか・・・」

今回ばかりは、そう思いました。

ところが・・・

先月、研修の受講生と話をしていたら、「ワンダーコアだけで、一カ月で六キロ痩せた」とのこと。

また、通販だけでなく、ドンキホーテでも一万円ちょっとで売っているそうです。

ここまで聞いたら、もう我慢ができません。

次の休みの日に、家の近くのドンキホーテに急行しました。

「あんた、何買ってきたの？」

「ワンダーコア。これ凄いんだよ、受講生が言ってたんだけど・・・」

「……」

無言の中に怒りを感じます。

「ワンダーコア」の良いところは、テレビを見ながらできること。

ただし、最近、「キーコー、キーコー」金属が擦れる音がしてきました。

「ちょっと、うるさいんだけど……」

女房と娘の評判は最悪です。

ちょっと肩身が狭いですが、今度ばかりは続けて、しっかりシックスパック(=六つに割れた腹筋)を手にしたと思っています。

結婚式（二〇一五年十一月）

「アケミの時は、喉に何も通らなくて、茶碗蒸ししか食べられなかったな…… 仕事も一週

間くらい手につかなかった・・・」

目の前の席に座った義理の父がしみじみと語ります。

天気は快晴。

今日は娘の結婚式です。

新郎新婦の入場前に、二人のプロフィール・ビデオが流れました。

音楽に合わせて映る、幼い頃からの数々の写真。

「ヤバイ・・・」

この段階でウルツとしてしまいます。

乾杯の後に、しばしの歓談。

お客様にご挨拶をして席に戻った私。

「今日は、もう飲むしか無い」

そう心に決め、ビールやワインをグビグビ空けました。

「お前は、こんな時によく飲めるね～～」

義父に感心されましたが、思いとは裏腹で、全く酔うことができません。

式が進み、いよいよフィナーレ。

両家の親が前に呼ばれました。

「さて、お二人がご両親への感謝の気持ちをこめて、ビデオを作りましたので、ご覧ください」

これまでの家族の思い出をまとめたビデオです。

「やめてくれ！」

とても直視できません。

そして、最後に感謝の言葉と、花束贈呈。

「もう無理」

涙が溢れだしました。

嬉しいとき。悲しいとき。寂しいとき。悔しいとき。感動したとき……
いろいろな涙がありますが、どれとも違う複雑な感情です。

六月に入籍し、すでに家を出ている娘。
すでに気持ちは整理できているはずだったのに……
何だか、急に実感が湧いてきました。
「一週間くらい仕事が手につかなかった……」
義父の気持ちがよく分かります。

女房の筋トレ（二〇一六年一月）

「ちょっと見て、凄くない？」
女房が袖をまくって、二の腕を見せます。

そこには、モコツとした力こぶ。
しっかりと筋肉が隆起しています。

娘がいなくなり、時間的に余裕ができた女房は、スポーツジムに通い始めました。
ちなみに、私が通っているジムとは別のところ。
「家族割引」というメリットよりも、「オヤジと一緒にいるのはイヤ」という気持ちが勝ったようです。

「黙々と走ったり、重りを持ち上げていてもつまらないでしょ」
昔からトレーニングに否定的だった女房。
しかしながら、やり出したらハマったらしく、週に三日、コンスタントに通っています。
それも、「加圧トレーニング」や、「ボディパンプ」といった、かなりハードなプログラム。
どうやら、担当している二十五歳のトレーナーがお気に入りみたいです。

継続は力なり。

週三日を半年間続けていると、肉体は改造されます。

筋肉がついて、体脂肪は減少。

家の体組成計によると、今、体内年齢は実年齢よりも十五歳以上若い三十五歳だそうです。

五十歳を超えて、一体、何を目標しているのか…

全く意味が分かりません。

「お父さんのお腹って、チャーシューみたいだよね」

最近、女房の言葉が、勝ち誇ったようになってきました。

もともと筋トレは私の領域であり、女房に勝てる数少ない分野。

その領域が侵されることは、気持ちいいものではありません。

しかしながら、なかなか継続ができない私。

ちなみに、夏に買ったワンダーコアは、今やハナのお昼寝場所になっています。

「このままではマズイ・・・」

今年は、女房にプライドをかけた戦いを挑むつもりです。

テニス合宿（二〇一六年六月）

先日、軽井沢でテニスの「合宿」をしてきました。

メンバーは、最年少が四十二歳、最高齢が六十七歳のジジイ十人です。

宿泊施設は、「ザ・合宿所」で、一泊二食付きで六千七百円と格安です。

部屋は二十畳くらいのすっきり焼けた畳敷き。

当然、十人一室で雑魚寝です。

初日は十一時半に集合して、昼食の後に即テニス。

ひとりずつ、ビデオでフォームを撮影しました。

夕食後は、部屋でそのまま大宴会。
昼間のビデオを見ながら、「あ～でもない、こ～でもない」のテニス談義。
自分の姿を見るのは初めての面々。
「え～～、自分ってこんなフォームなの？ もっと格好良いと思っていたのに・・・」
私を含め、皆、ショックを受けました。

ジジイ十人が一室で寝ると、まあ、騒々しいです。
「ゴーゴー、ガーガー」
何だか猛獣のオリの中にいる感じ。
「アギヤ～～～」
時に、奇声も聞こえてきます。
「早く寝た者が勝ち」の状況の中で、寝遅れてしまった私。
耳栓を持参しなかったことを、心から後悔しました。

歳をとると、長く寝ていることができなくなります。
夜中まで、あれだけ飲んだにもかかわらず、六時には皆、すっかりお目覚め。
昨晚のビデオを意識しながら、朝練に励みます。
朝食の後は、五対五の団体戦。
男のプライドがかかっているのです、皆、真剣そのものです。

二日間で合計十時間のテニス三昧。
さすがに身体はボロボロ。
道路が空いていたので、私は、三時には帰宅できたのですが、完全にポンコツ状態。
ソファで缶ビールを一本飲んだら、気がついたら、夜の九時でした。

思い出すのは三十数年前のサッカー合宿。
何だか、青春時代に戻った感じで、ちょっと懐かしかったです。

EXILE（二〇一六年七月）

先日、三十年振りにコンサートに行きました。
EXILEのボーカル、ATSUSHIの単独ライブ。
ファンクラブに入っている女房が、チケットをゲットしました。
本当は、娘と行くはずだったのですが、都合ができて娘がドタキャン。
「せっかくのチケット、もったいないからアンタ行く？」
代役として、私が行くことになりました。

西武ドームでのコンサート。
たぶん、四万人くらいは入っているでしょう。
その中の約九割は女性。
残り一割の男性も、ほとんどが十代、二十代の若者たち。
五十過ぎのオッサンは、まさに「異物」です。

スタートしたら、一曲目から総立ちです。

「え？ いきなり立つの？」

コンサート初心者の私は、戸惑ってしまいます。

しかしながら、なるべく周囲に、異物感を与えたくはありません。

皆に合わせて立ち上がり、皆に合わせて小旗を振ります。

それでも、やはり、気恥ずかしい……

旗の振り方も、どうしても遠慮勝ちになってしまいます。

しかし……

人は時間が経つにつれ、だんだんと慣れてくる生き物。

途中からは、音楽に合わせてステップを踏んだり、歌を口ずさんだり……

三時間近くのコンサートでしたが、その中の二時間半くらいは立っていました。

いや～～～、疲れたの何のって！

終わった時には、もうグッタリで翌朝まで後遺症が残っていました。

「年甲斐もなく」

よく聞く言葉ですが、私は結構、好きかも知れません。

敢えて若い人の中に交じり、敢えて若い人と同じようなことをやってみること。

最近、いろいろと模索中です。

加齢臭（二〇一六年九月）

「はい、これプレゼント」

綺麗な紙に包まれた箱を差し出す女房。

「あら、珍しや。誕生日でも父の日でもないのに・・・」

何だか、嫌な予感がします。

箱を開けてみると、そこには液体が入った瓶。

瓶の表面には、ナイスバディの外国人男性の写真が貼ってあります。

「何これ？」

「アバクロのコロンだよ」

アバクロというのは、アバクロンビー&フィッチというアメリカのカジュアルファッションブランド。

サッカーのベッカムをはじめとした、多くの有名人が愛用しています。

女房が買ってきたのは、そのブランドのコロンでした。

「ちょうど、店の前を通ったので買ってきた」

「そう、ありがとう。ところで、どうして？」

「まあ、誰も歳をとると体臭がキツくなるからね・・・」

「誰も」と一般論で語ったのは、私に対する優しさなのでしょうが、要するに言いたいこと

は、「私が最近、ちょっと臭い」ということ。

「やっぱり臭い？」

「まあ、歳の割にはマシな方だと思うけど・・・ お酒を飲んで帰ってきた時なんか、結構、キツイかな・・・」

「カレイシュウ」。

確かに、満員電車で、オヤジさんの隣に立っていると、「ウツ」と思うことがあります。

そろそろ、私も「発生源」。

他人様に迷惑をかけないようにしないとけません。

翌日、「アバクロ」のコロンをつけてみましたが、生理的にちょっと無理です。

「ん～～～ どうするか・・・」

次の日曜日にドラッグストアに行って、とりあえず「8×4 MEN」を買ってきました。

そして、翌日から、身体全体に「シュツシュ」。

それから、ボディークリームも、男の臭いを消すという「デオー」というものになりました。コロロンで臭いを消すのではなく、まずは、臭いをできるだけ少なくしよう！オジサンの努力は続きます。

御来光（二〇一七年一月）

「今日、これから車使っている？」

「どこに行くの？」

「たぶん御来光を見に行く」

「はあ？？？」

伊藤家の次女のみよこ。

ほぼペーパードライバーで、車を使うのは、せいぜい家の近くの買い物くらいです。

それが、「御来光」とは？

自分で運転できる筈がありません。

「使っても良いけど、うちの車の保険は家族限定だからね」

「大丈夫。セブンイレブンで一日五百円の自動車保険に入れるから・・・」

翌日の夜のこと。

「ブオー——」

家の外で車の音がしました。

「ミヨコが、帰ってきたね」

女房が窓から外を見たら、車庫入れに苦労している様子です。

「まったく、運転が下手なんだから・・・ 私が代わりに入れてくるね」

女房が外に出て行きました。

「こんばんは・・・」

「ん？」

女房とミヨコの他に若い男性がひとり立っています。
ちょうど、長女のヨシミと、その旦那もうちに来ていた日。
家族全員から、一斉に好奇の目が向けられました。

「あまり車の運転に慣れていないもので・・・」

どうやら運転していたのは彼だったようです。

「食事していく？」

予想外の展開にやや動揺しながら訊く私。

「あ、いや、さすがにいきなりは・・・」

彼氏は明らかに困惑気味です。

「二人で外に食べに行くから大丈夫」

ミヨコが助け舟を出しました。

「あ、そう。じゃあ、また」

逃げるように二人は、家から出て行きました。

これまで彼氏の存在を知らなかった面々。

「誰？誰？誰？誰？誰？誰？誰？誰？」

「そこそこイケメンだったよね・・・」

「え～、ちょっと軟弱で私はあまりタイプじゃないな・・・」

「ダンス関係で知り合ったのかな？」

「いや、バイトじゃない？」

女房と長女は大盛り上がりです。

チンコーン！

しばらくして、伊藤家の家族LINEにミヨコからメッセージが入りました。

「氏名：●●●タカヒロ 生年月日：1993年×月×日 住所：さいたま市 出身：東京都中野区 学歴：大卒 職業：会社員 プロフィールです(笑)」

どうやら、我々の気持ちを察したようです。
「ナイス！ なかなか気が利くじゃん」
長女が返信しました。

翌日のこと。

女房と出かけるために車に乗って、ナビを操作したら、しっかり検索履歴が残っていました。

○御殿場プレミアムアウトレット

○ルートインホテル御殿場

「馬鹿だよね～ 履歴くらい消したらいいのに。 行動バレバレだよね」
思わず笑ってしまいました。

彼氏との会食（二〇一七年二月）

「今度、うちで食事したいって言っているんだけど、お父さんは、来週の日曜日は家にいるの？」

次女の彼氏のタカヒロ君。

いきなり我が家を訪れ、そそくさと帰ってしまったことが気になっているとのこと。

当日、女房はここぞとばかり、気合を入れて料理を作っています。

私は、何となく手持無沙汰で、愛犬のハナと戯れていました。

「ピンポーン」

ミヨコと彼氏の登場です。

「先日は失礼しました。●●●タカヒロです」

しっかりした、明るい挨拶は好印象です。

その後、一杯飲みながらの会食。

「タカヒロ君は、結構飲めるの？」

「まあまあです」

私も二人の娘の父親。

娘の彼氏に会うことは、当初は緊張していたのですが、最近は、大分、慣れました。
特に、次女のみよこの彼氏はタカヒロ君で三人目で、さすがに免疫がついています。

「みよこは何を飲む？」

「私はお茶」

「あれ、みよこは家では飲まないんだ。外では俺より飲むよね。これまで何度も介抱したし……」

「ちょっと！」

タカヒロ君は、意外と素直で、割とおしゃべり。

おかげで、親が知らないみよこの生態がだんだん明らかになってきます。

仕事で東南アジアに行くというタカヒロ君。

「フィリピンはとても良いですよ。旅行で行った時も最高でした！ なあ、ミヨコ……」

「ん、ん、ん、そうね……」

いきなり話を振られて困惑気味のミヨコ。

「確か、フィリピン旅行は、アヤノちゃんに行くと言っていたよな……」

私はミヨコを見て、無言で語りかけました。

ミヨコは、ぱつが悪そうに、下を向いてうつむいたままです。

食事が終わって、ミヨコがタカヒロ君を駅まで送っていきました。

「今頃、きっとタンノ君は、ミヨコに怒られているよね。ペラペラ余計なことをしゃべり過ぎだ……」

「そうね…… ミヨコはすごく怖い顔していたものね。でも、まあ、いいんじゃないの。正直で……」

我々、夫婦の会話です。

さて、これから二人はどうなっていくのか？
四人目の彼氏は果たして登場するのか？
乞うご期待です。

ぶらさかり健康器（二〇一七年五月）

「イテッ！」

ある日、ドライヤーを使おうとしたら、左肩に激痛が走りました。

「肩関節周囲炎」。いわゆる「五十肩」です。

以前から、「違和感」はありましたが、最近は、だんだん症状が重くなってきています。

「最近、ちょっと肩が痛くてさ・・・」

夕食時に女房にカミングアウトしたら、何と女房も同じ悩みを抱えていたとのこと。

「ぶら下がり健康器を買おうよ。あれで肩を伸ばせば、楽になるんじゃない」

私が健康器具やダイエット器具を買うときは、ひどく馬鹿にする女房。

今回は珍しく、彼女からの提案です。

「良いね～」

私は、即座に同意して、早速、アマゾンで購入しました。

数日後に商品が到着し、組み立てました。

「よし、これで懸垂すれば、筋トレにもなるし、一石二鳥だな・・・」

私は、気合を入れて、健康器に向かったのですが・・・

「えっ、嘘、重っ！」

ぶら下がってみたら、懸垂どころではありません。

自分の体重を支えるだけで、ひと苦勞。

「ウ~~~~」

情けないうめき声を出しながら頑張っても、十秒くらいがやっとです。

「アハハハハハ…」と、大爆笑する女房。

「ちょっと、どきなさいよ。私がやるから」

普段、ジムで鍛えているので自信満々です。

しかし、ぶら下がってみたら、私と同じ。

情けない姿が、一夜干しのスルメのようです。

「まあ、最初は、こんなものだね。無視しないで続けていれば、そのうち、しっかりとぶら下がるようになるよね。」

ショックを受けながらも、せっかく買った健康器。

二人で、前向きな会話を交わしました。

それから一カ月。

今、「健康器」が「室内物干し」になっていることは、言うまでもありません。

黒の歯ブラシ（二〇一七年八月）

次女の彼氏のタカヒロ君。

最近、我が家に頻繁に出没するようになりました。

土用の丑の日。

テニスのレッスンが終わり、昼に帰ってきたら、またまたタカヒロ君が来ていました。

「お父さんとお母さんは、これから鰻を食べに行くけど、お前らは、昼はどうするの？」

社交辞令として、一応、尋ねてみました。

「大丈夫です。自分たちもどこかに食べに行きますから」

当然、そういう答を予想したのに、「行きます！ 行きます！」。

「え？」

彼女の親父と一緒に食事に行くなんて、堅苦しくて、私だったらできれば避けたいところ。

それなのに、何のためらいもありません。

結局、四人で駅のそばの鰻屋に行きました。

予想外の出費です。

さらに、先日のこと。

次女から女房にLINEが入りました。

「今、新所沢でタカヒロと飲んでいるんだけど、うちに泊めてあげて良いよね」

夜の十一時を過ぎています。

「この時間だから、さすがにダメとは言えないよね・・・」と女房。

極めつけは、その翌朝。

朝早く起きて洗面所に入ったら、新しい歯ブラシが、歯ブラシ立てに刺さっています。それは、私が女房、娘の歯ブラシを間違わないように、わざわざ自分で買ってきた黒の歯ブラシ。

「これは、また来るというサイン？」

たまたま洗面所に入ってきた女房も気づきました。

「お父さんは、威厳が無いからね・・・」

「黒は俺の色だったのに・・・」

そろそろ侵略を食い止めないと、まずいことになりそうです。

マウンテンバイク（二〇一七年十月）

「ドテ、ガシャ、ザザッ・・・ ウ～～～」

山の中で。中年男の怪しいうめき声が響きます。

五十代も半ばになり、刺激が乏しい毎日。

「何か新しいことを！」とマウンテンバイクを始めました。

春から秋にかけて、冬場のスキー場が、マウンテンバイクの専門コースに変わります。

フルフェイスのヘルメットをかぶり、膝と肘、さらには胸までプロテクターをつけて走ります。

「まるで仮面ライダーみたい・・・」

娘の言葉は的確です。

ゴンドラやリフトで上まで行って、いざ出陣。

頭の中では、山の中を颯爽と走る姿をイメージしているのですが、現実には甘くありません。

まだ一年のキャリアしか無い私。

バランスを崩して倒れたり、カーブを曲がり切れずに藪に突っ込んだり・・・

擦り傷、切り傷、打ち身に捻挫。

防具をつけているので大怪我はしませんが、小さい怪我は日常茶飯事です。

「お父さんの足は傷だらけ。まるで小学生みたいだよね・・・」
確かにその通りです。

若い人がビュンビュン走っていると、やはり悔しいです。

「早く上手になりたい！」

そういう一心で、頑張って練習に励みます。

近所の公園で、止まった状態でバランスをとる練習をしたり、赤いマーカーコーンを置いて、コーナーリングの練習をしたり・・・

「あのさ、斎藤さんの奥さんが、公園でアンタの姿を見たってさ・・・」

「あっ、そう・・・」

「ん～～、頑張るのは良いけれど、練習は早朝とかの方がいいんじゃない？」

「何で？」

「小学生みたいに見えたらしいよ・・・」

確かに、公園でヘルメットをかぶって黙々と自転車の練習をしているオジサンは珍しい生き物でしょう。

女房の「恥ずかしい」という気持ちも理解できます。

ということで、最近は、まだ暗いうちから、公園でひたすら汗を流しています。

洗濯ネット（二〇一七年十一月）

「洗濯ネットのチャックをきちんと閉めなかったでしょ！」

女房が、すごい剣幕で怒っています。

休日の朝、ゆっくり起きた私は、コーヒーを飲みながらのんびり新聞を読んでいました。

そんな平和なひと時をぶち壊す一撃。

「何でそんなに怒っているの？」

意味が分かりません。

「洗濯ネットから、腰ベルトが飛び出したのよ！」

ちなみに、腰ベルトは、私がテニスをする際に、腰痛防止で使っているサポーター。

「それが、どうしたの？」

「マジックテープがタオルに絡みついたんだからね！」

「それが？」

「どんなタオルだと思っているの？」

「ん？」

「三代目のタオルよ！！！」

九月に念願叶って、三代目 J Soul Brothers の大阪公演に行くことができた女房。

その後、東京ドームで開催された追加公演に、何と三回も行きました。

そのタオルは、コンサートの中で、グルグル回して使う物のようです。

「タオルくらいで文句言うなよ！」

女房の言い方にちょっと頭にきた私。

素直に謝ればいいものの、反射的に言い返してしまいました。

カ〜〜ン！

戦いのゴングが鳴り響きます。

「あんたは、本当にだらしがないんだから。塗り薬も出しっ放しだし、コンタクトレンズも、つけた後のケースを置きっ放し！！！」

女房からの波状攻撃が続きます。

「お前だって、片付けない時があるだろ！ 電気だって、結構つけっ放しだし・・・」

私はほとんど防戦一方。

ガードを固めながら一撃を食らわせたいのですが、なかなか具体的なことが思い出せま

せん。

「スポーツドリンクを入れてた水筒も、三日後に出すし・・・カビが生えていたんだからね！」

女房は、ついに三カ月前のことまで持ち出しました。

もはや、私はKO寸前です。

二人のやりとりを、それまで黙ってきいていた娘。

「あ～～くだらない・・・とても五十代半ばの夫婦の会話とは思えない」

ボソッとつぶやき、自分の部屋に戻ってしまいました。

「……………」

「……………」

確かにくだらないと言えばくだらない喧嘩。

しかし、意外と、こんな些細なことが熟年離婚につながるかも・・・

私もさすがにそれは勘弁なので、最近は、しっかりと洗濯ネットのチャックは閉め、コンタクトレンズのケースは、ゴミ箱に捨てるようにしています。

同棲（二〇一八年六月）

「今日、不動産屋さんに行ったんだけど・・・」

「不動産屋？」

「うん。私、タカヒロと同棲するから」

「はあ？」

伊藤家の次女のミヨコは、今年、社会人1年生。

四月二日の月曜日が入社式です。

その前日の日曜日、夜遅く帰ってきて、いきなりの発言。

「エープリルフールだよね…」
思わず絶句してしまいました。

周囲の人に話を聞くと、今の時代、結婚前の同棲は、それほど珍しいことでは無いとのこと。

また、タカヒロ君は、これまで何度も我が家に来て、私も「良い奴」だと認めています。
「ここで反対して、別れることになっても嫌だな…」
そんな思いから、「ダラダラ、結婚を引き延ばさないこと」を条件に了承しました。

二人はそれぞれ、自宅住まい。
同棲する部屋には、家具も家電もありません。
「こういうのは、女性側で用意しないとね… 電子レンジはどうでしょうか？ 炊飯器は…」
女房と娘は、妙に楽しそうです。
「お父さん、午後にニトリに連れて行って」

キッチンマット、フライパン、洗濯バサミ、等々、結局、四万円の買い物に付き合わされました。

当然、支払いは、私名義のカードです。

「お前これだけ買い物したら、自宅に戻ってきても、置き場が無いからな！」

嫌味を言ったら、「そんなこと言わないの！」と女房からバシッと一言。

釈然としません。

さて、引っ越しの日。

家具や家電は、直接、部屋に届くので、自宅から運ぶものはわずかです。

「わざわざ業者に頼むのは、もったいないよね」

軽トラをレンタルして、自力で行うことになりました。

長女の旦那も繰り出され、私と二人で荷物を積みます。

現地には、搬入を待つタカヒロ君。

男三人衆の引っ越しです。

昼時になったので、私が「ほっともつと」で三人分の弁当とコーラを買ってきました。

車座になって食べる三人。

「なんだかな～～」

心の中でつぶやきます。

とにかく、このままスナリと結婚してくれることを、願うしかありません。

時代は変わった（二〇一八年十一月）

今年の六月から彼氏と同棲している伊藤家の次女。

ちよくちよく自宅に戻り、コストコで買い込んだ食材を持って帰ります。

自宅にいる時は、全く家事をしなかった彼女。

掃除、洗濯、炊事等々、仕事と両立しながら、何とかやっている様子です。

ある日、伊藤家の家族LINEに次女から、写真付きのメッセージが送られてきました。写真を見たら、ホールケーキを前にして、ピースサインをしている娘と彼氏。ケーキの横には、指輪が写っています。

「もしかして？」

メッセージを読んでもみると案の定。

「じゃーん！ 昨日、指輪もらっちゃった。結婚する！」

いきなりの展開です。

「オイオイ、こんな大事なことをLINEで報告するか??？」

ちょうど、出張中だった私。

しばらくの間、画面を見ながら凍り付いていたら、ピンポン、ピンポン。

続々とメッセージが入電します。

「おめでとう！」と女房。

「おめでとう！！」と長女。

まさに、速攻の返信です。

さすがに私も、このまま既読スルーする訳にはいきません。

「おめでとう！！！」

ちょっと複雑な気持ちで、返信しました。

その翌週に二人で我が家に来てあいさつ。

さらに、その翌週には、秋のブライダルフェアに行って、式場を決めてきてしまいました。

「来年の六月×日。場所は、赤坂の●●●。ちょうどキャンセルがあったのラッキー！

速攻で決めてきたのでよろしく！！」

またもやLINEでの報告です。

さらにさらに、おとといのこと。

またしても、写真付きのLINEの入電です。

二人そろって、「婚姻届け」を持って、市役所の前で撮った写真。

「We are just married! Year!!」だって。

結婚することも、結婚式の日取りも、そして結婚報告も全てはLINE。
いやいや時代は変わりました。

第二の子育て（二〇一九年七月）

「オギャー——」

先月、三人目の孫が産まれました。

今度は次女の第一子です。

「子供たちも、皆、独立して、それぞれの家庭を築いたので、親としては、ひと安心。 今後は、女房と自由を満喫しよう！」

なんて思っていたのですが……

何と、何と、何と、何と、……

実は、諸事情あって長女が二人の子供を連れて、我が家に戻ってきてしまいました。

ちなみに、子供は、今、二歳半と八ヵ月です。

シングルマザーとなった長女は、今後の経済力を高めるために、四月から栄養士の学校に通っています。

ということで、平日の昼間は、女房がベビーシッティング。

私もひとりで遊びに行くのは気が引けるので、家にいる日は、孫の世話をしています。

先日も、二歳半の孫を連れて、デパートの屋上遊園地に行ってきました。

あっちの車に、こっちの飛行機……

男の子なので、それは大変。

とにかく、じっとしていないので、帰ってきたらグツタリです。

二年前のこと。

余生が見えてきた私は、「一生の中でやりたいこと」を五十個書き出しました。
南半球への旅行、バンジージャンプ、宝塚観劇・・・
昨年の上半までは、順調にこなしていたのですが、今は完全に休止状態。
とても、そんな余裕はありません。
「こんなはずじゃなかったのに・・・」
双六で言えば、上がり目前で、振り出しに戻った感じです。

ただし・・・

一方で、楽しいことも多々あります。
孫たちの成長を見れたり、ちょっとした仕草で大笑いしたり・・・
二人の娘が幼い頃、私は仕事でほとんど家にいませんでした。
子育ては、全て女房まかせでしたので、日々、新しい発見があります。

「全く、疲れちゃうよね・・・」

女房もぼやいてはいるものの、まんざらでは無い様子です。

人生いろいろ。現状肯定。

私も、前向きに、「第二の人生」ならぬ、「第二の子育て」を楽しもうと思っています。